

若松町東遺跡
第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書

—新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松3・4）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013年3月
神戸市教育委員会

若松町東遺跡

第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書

—新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松3・4）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

神戸市教育委員会

序

本書は、兵庫県南部地震により大きな被害を受けた神戸市長田区、JR新長田駅南側での震災復興再開発事業に伴い発見された若松町東遺跡での発掘調査の成果について報告するものです。

新たに発見された遺跡からは、今からおよそ2,300年前頃の縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての遺構・遺物などが検出されました。当地に人々が定住しはじめた頃の痕跡と考えられ、神戸の歴史を語る上でも重要な発見といえます。

地域の歴史を語る上で貴重な発見があったことをご記憶いただき、着々と進む新たな街づくりの足跡として活かしていただけましたら幸いです。

最後になりましたが、現地における発掘調査事業の円滑な推進、ならびに報告書刊行にご協力いただきました関係諸機関、各位に対し、厚く御礼申し上げます。

2013年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市長田区若松町3・4丁目において、新長田駅南地区震災復興再開発事業に伴い実施した若松町東遺跡第1・2・3・4・5・6次発掘調査についての報告である。
 2. 現地での調査は、平成19・20・22・23年度の4箇年、計6回、神戸市教育委員会、財團法人神戸市体育協会が神戸市都市計画総局の依頼を受けて実施したものである。
 3. 遺物整理、報告書作成作業は平成24年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施した。本書の記述は、組織表に記した各調査担当者の事業報告を基に藤井太郎が編集を行った。遺物実測及びトレイスは藤井が行い、遺構図のトレイスは各調査担当者、藤井が行った。なお、平成19年度第1次調査、平成20年度第2次調査については、当該年度の『神戸市埋蔵文化財年報』に概要を報告している。なお本書には整理作業後に得た知見を加えており、内容が異なる部分は本書の記述をもって正式とする。
 4. 本書に掲載した位置図には、国土地理院発行の25,000分の1地形図の「神戸首部」、「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1地形図の「大橋」、「長田」を使用した。
 5. 本書で使用した方位は座標北で、その座標は世界測地系の平面直角座標系第V系である。標高は東京湾中等潮位(T.P.)で表示した。
 6. 現地での遺構検出状況等の写真撮影は各調査担当者が行った。出土遺物の写真撮影は神戸市埋蔵文化財センターにおいて杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影した。
 7. 遺跡の航空写真撮影ならびに図化作業については株式会社GEOソリューションズに委託した。
 8. 本書にかかる出土遺物及び図面・写真等の記録類は神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
 9. 現地での調査及び本書の作成にあたっては下記の方々にご協力いただきました。ここに記して深謝いたします。
- 神戸市都市計画総局 新長田再開発事務所　神戸アーカイブ資料館 東充氏
10. 発掘調査及び報告書作成事業は神戸市文化財保護審議会による指導のもと、以下の組織で実施した。

神戸市文化財保護審議会委員（歴跡・考古資料担当）
 墓上重光 前神戸女子短期大学教授（～平成19年7月14日）
 工樂善道 大阪府立狭山池博物館長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局	平成19年度	平成20年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
教育長 小川謙三	橋口秀志	橋口秀志	橋口秀志	橋口秀志	水井秀憲
社会教育部長 黒住章久	黒住章久	黒住章久	太寺直秀	水井秀憲	東野展也
社会教育部参事（平成24年度より文化財担当部長） 柏木一孝	柏木一孝	柏木一孝	柏木一孝	安達弘一	安達弘一
（文化財課長事務取扱）					
社会教育部主幹（平成24年度より文化財担当課長） 丸山 潔	丸山 潔	渡辺伸行	千種 浩	千種 浩	丸山 潔
渡辺伸行	渡辺伸行	千種 浩	千種 浩	千種 浩	千種 浩
埋蔵文化財指導係長 黒住章久	千種 浩	千種 浩	千種 浩	千種 浩	千種 浩
埋蔵文化財調査係長 千種 浩	千種 浩	千種 浩	千種 浩	千種 浩	千種 浩
専門会議					
文化財課主査（平成24年度より文化財担当係長） 丹治康明	丹治康明	丹治康明	丹治康明	丹治康明	丹治康明
安田 滋	安田 滋	安田 滋	安田 滋	安田 滋	安田 滋
山本雅和	山本雅和	山木 厳	山木 厳	山木 厭	山木 厭
阿部敬生	阿部敬生	佐伯二郎	佐伯二郎	佐伯二郎	佐伯二郎
中谷 正	中谷 正	中谷 正	中谷 正	中谷 正	中谷 正
調査担当学芸員			西園巧次	須藤 宏	
中谷 正	中谷 正	西園巧次	須藤 宏		
整理担当学芸員 黒田恭正	黒田恭正	黒田恭正	黒田恭正	池田 穎	
（埋蔵文化財センター担当） 西岡誠司	西岡誠司	西岡誠司	西岡誠司	内藤俊哉	
佐伯二郎 富山直人	佐伯二郎 富山直人	佐伯二郎 富山直人	山口英正	藤井太郎	
池田 穎	池田 穎	池田 穎	阿部敬生	阿部 功	
保存科学担当学芸員 中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介
財團法人 神戸市体育協会	平成19年度	平成20年度			
会長 表孟 宏	表孟 宏	表孟 宏			
副会長（専務理事事務取扱） 水田祐三	水田祐三	小川謙三			
常務理事 田原四郎	田原四郎	田原四郎			
秘書課長 横間 勇	横間 勇	木沢 敏	竜輪龍男		
秘書係長 山木雅和	山木雅和	藤井太郎			
總務課主査（文化財課主査兼務） 斎木 優	斎木 優	斎木 優			
調査担当学芸員 斎木 優	斎木 優	斎木 優			

目次

序言

目次

I. 若松町東遺跡について	1
II. 調査の概要	1
1. 現地調査	4
2. 出土遺物整理・報告書作成	4
3. 調査の概要	5
(1) 第1次調査	21
(2) 第2次調査	21
(3) 第3次調査	25
(4) 第4次調査	29
(5) 第5次調査	35
(6) 第6次調査	39
III. まとめ	41
報告書抄録	

図版目次

調査位置図	1
第2回 事業地地図	2
第3回 周辺の主な遺跡	3
第4回 第1～5回調査 全体平面図	5
第5回 1区平・断面図	6
第6回 2・5区平面図	8
第7回 3区平面図	11
第8回 SX301 平・断面図	12
第9回 SK307 平・断面図	12
第10回 4区平面図	14
第11回 4区基本土層図	14
第12回 4区基礎面3・4 平面図	15
第13回 SB401 平・断面図	16
第14回 SK401 平・断面図	17
第15回 SA402 平・断面図	18
第16回 6・7区平面図	20
第17回 8区平面図及び基本土層図	22
第18回 SB801 平・断面図	22
第19回 8～1区基本土層図	22
第20回 SD801～807 平・断面図	24
第21回 調査区平面図	26
第22回 基本土層図	26
第23回 SK05 平・断面図	27
第24回 調査区南西部構造平面図	27
第25回 第1～3回調査 全体平面図	28
第26回 第1道構面平面図	30
第27回 SB101 平・断面図	30
第28回 SB201 平・断面図	30
第29回 第2道構面平面図	31
第30回 SX203～205平面図	33
第31回 SX205 平・断面図	33
第32回 SK207 平・断面図	33
第33回 SK208 平・断面図	34
第34回 SK218 平・断面図	34
第35回 第1道構面平面図	37
第36回 第1道構面主要検出遺構配置図	37
第37回 第2道構面平面図	37
第38回 第3道構面平面図	37
第39回 SK02 平・断面図	39
第40回 土刷断面図	40
第41回 出土遺物実測図(1)	42
第42回 出土遺物実測図(2)	43

挿図写真目次

挿図写真1 神戸の壁関連写真	日次裏
挿図写真2 潤沢作業風景	4
挿図写真3 遺物整理作業風景	4
挿図写真4 平成20年(2008)の事業地風景	4
挿図写真5 平成25年(2013)の事業地風景	4
挿図写真6 SK101	7
挿図写真7 SK102	7
挿図写真8 2区基本土層	9
挿図写真9 3区全景	11
挿図写真10 4区南東部SB401周辺近景	16
挿図写真11 SB401SP402	16
挿図写真12 SB401SP403	16
挿図写真13 SK401土刷断面	17
挿図写真14 SK401檢出状況	17
挿図写真15 SA402Wから剥り状況	18
挿図写真16 SA402SP410 断面	18
挿図写真17 SP215出土状況	27
挿図写真18 SB201全景	30
挿図写真19 第2道構面全景	38
挿図写真20 第1道構面全景	39
挿図写真21 SK207検出状況	39
挿図写真22 調査作業風景	40

表目次

第1表 調査次数表	2
第2表 周辺の主な遺跡	3

写真図版目次

写真図版1 カラー図版	
1. 調査地遠景(海上より)	
2. 調査地遠景(東から)	
写真図版2 カラー図版	
1. 第1次調査SK301出土 薄跡	
2. 第4次調査SK207出土 深跡	

写真図版3	
1. 第1次調査1区全量(北から)	
2. 第1次調査2区西半全量(北から)	
3. 第1次調査2区東半全量(西から)	

写真図版4	
1. 第1次調査3区全量(南から)	
2. SX301検出状況(北東から)	
3. SX301土刷断面(北東から)	
4. SK307検出状況(南から)	
5. SK307土刷断面(西から)	

写真図版5	
-------	--

1. SK301全量(北から)	
2. SD302全量(北西から)	
3. 第1次調査4区全量(北から)	
4. 第1次調査4区全量(南東から)	
5. 第1次調査5区全量(北東から)	
6. SK501全量(西から)	

写真図版6	
1. 第1次調査6区南北トレーンチ全量(北から)	
2. 第1次調査6区全量(北東から)	
3. 第1次調査7区全量(北東から)	
4. 第1次調査7区東西トレーンチ全量(東から)	

写真図版7	
-------	--

1. 第2次調査8～1区全量(南東から)	
2. 8～1区南北トレーンチ全量(南東から)	
3. SD802～1・2	
4. SD802～1・2・土刷断面(北西から)	
5. SD801 遺物出土状況(西から)	

写真図版8	
-------	--

1. 第2次調査8～2区全量(東から)	
2. SB801全量(東から)	
3. SB801 SP801土刷断面(東から)	
4. SB801 SP802土刷断面(南から)	
5. SB801 SP804土刷断面(南西から)	

写真図版9	
-------	--

1. 第2次調査8～1区全量(北から)	
2. 第2次調査8～2区全量(南東から)	
3. 第2次調査8～3区全量(南から)	

写真図版10	
--------	--

1. 第3次調査区全量(空撮写真・東から)	
2. 第3次調査区全量(北西から)	

写真図版11	
--------	--

1. 第3次調査区東半全量(南東から)	
2. 第3次調査区南東部全量(南から)	
3. 第3次調査区北西部全量(北西から)	

写真図版12	
--------	--

1. SK05 遺物出土状況(北東から)	
2. SP215 遺物出土状況(北西から)	
3. SK21石斧出土状況	

写真図版13	
--------	--

1. 第4次調査区北半第2道構面全量(空撮・南東から)	
2. 第4次調査区北半第1道構面全量(南東から)	
3. 第4次調査区北半第2道構面全量(南東から)	

写真図版14	
--------	--

1. 第4次調査区北半第2道構面東部全量(南東から)	
2. SX203・204・205全量(北西から)	
3. SX203全量(北西から)	

写真図版15	
--------	--

1. SB101北半全量(南東から)	
2. SB101 P19 遺物出土状況(東から)	
3. 第4次調査区南半第1道構面全量(北から)	

写真図版16	
--------	--

1. SK207 検出状況及び上刷断面(西から)	
2. 同 上刷断面近景(西から)	
3. 同 最終段階遺物検出状況(北から)	

写真図版17	
--------	--

1. 第5次調査区第1道構面全量(東から)	
2. 第5次調査区南西部全量(南東から)	
3. 第5次調査区北西部全量(東から)	

写真図版18	
--------	--

1. 第6次調査区第2道構面全量(南西から)	
2. SD01近景(南から)	
3. SD01中南部堆積状況上刷断面(東から)	

写真図版19
1. SK02検出状況（南から）
2. 同 土壠断面（南から）
3. 第6次調査区基本土層
写真図版20
遺構出土の遺物
写真図版21
遺構及び遺物包含層出土の遺物（1）

写真図版22
遺構及び遺物包含層出土の遺物（2）
写真図版23
1. 出土石器（石鏃・尖頭器・石錐・楔形石器）
2. 出土石器（磨石・石皿片）
3. 出土石器（結晶片岩・石斧）

かつて事業地内にあった復興のシンボル『神戸の壁』について

昭和2年（1927年）、若松公設市場に建てられた防火壁は、戦災と震災の二度の災害に耐え、残った。再開発事業の決定により市民の方々の尽力により移築され、今は『鎮魂と復興』を象徴するモニュメントとして、壁自体は北淡震災記念公園（淡路市）で保存、基礎のコンクリートを背もたれに再生したベンチが兵庫県立人と防災未来センター屋外広場（中央区臨浜海岸通）、新長田の再開発ビル「アスタくにづか」の地下に設置され、活用されている。かつての事業地の風景を語り継ぐものとして記します。

*印の写真是、神戸アーカイブ写真館 東充氏よりご提供いただいたものである。記して深謝いたします。



JR新長田駅南地区を南西から望む。右上の家並みの中に防火壁の天端が望まれた。(89.4) *



2007年（平成19）第1次調査3区での調査風景。右上の建物の位置にかつて壁が建っていた。



移築前の壁（98.1.12）*



人と防災未来センター前に置かれたベンチ



1.17壁の前での「鎮魂の祈り」(99.1.17) *



アスタ地下のベンチ。背もたれが壁の基礎である。

挿図写真1 神戸の壁関連写真

I. 若松町東遺跡について

六甲山地と大阪湾とに挟まれた細く長い神戸の市街地の西部、現在のJR新長田駅の南側に若松町東遺跡は位置する。新長田駅周辺は、昭和40年に策定された「神戸市総合基本計画」において新たに西部副都心として位置付けられ、繁華ではあるが中小工場や商店、住居が混在する町並みから駅前公共施設の整備などの再開発事業の推進により新たな街づくりの途上にあったが、平成7年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）により甚大な被害を被った。震災後は再開発ビルを中心に、高層建築が林立し新たな景観を創造しつつも、鉄人プロジェクトが成功を収めるなど、従前の地元のつながりが新たな形で創出されつつある。

若松町東遺跡は平成19年の新長田駅南地区震災復興市街地再開発事業に伴う試掘調査において発見され、JR新長田駅の南側の東西100m、南北150mの範囲を指定している。遺跡の名称は所在する町名に由来するが、東西に細長い同町の西端に弥生時代～中世の集落遺跡である「若松町遺跡」がすでに登録されており、地名と位置的な関係から「若松町東遺跡」となった。

地形的には、六甲山系の西端に特徴的な山容を映す高取山を北に望み、苅藻川（現新湊川）と妙法寺川の兩河川間に挟まれた現標高5～6mの、北西から南東への緩やかな下がり地形を呈する沖積地上に立地している。苅藻川は東約0.7km、妙法寺川は西約1.4kmに位置し、現在の海岸線までの距離は約0.8kmである。

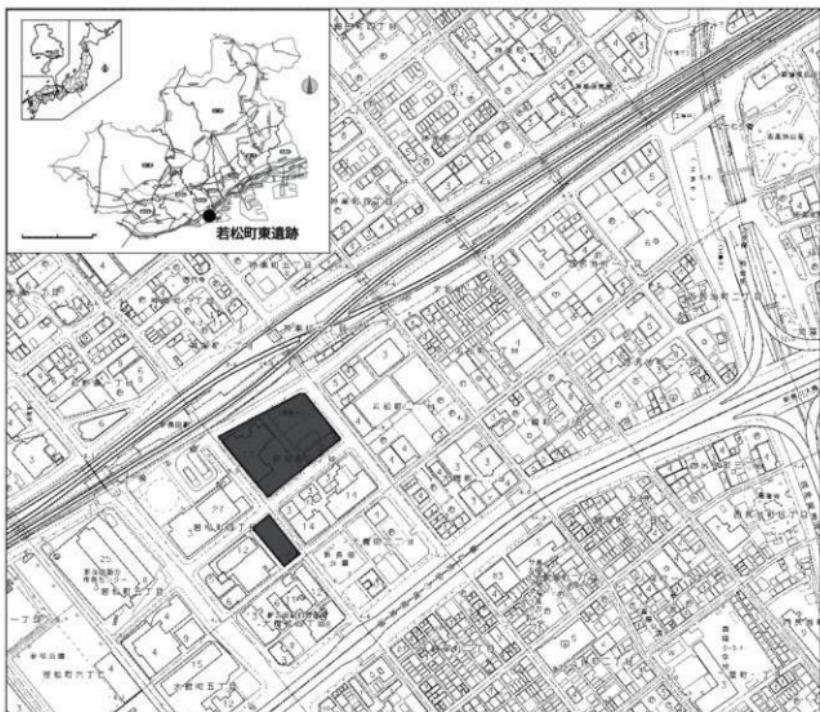


図1 調査位置図

II. 調査の概要

阪神・淡路大震災の被害が甚大であったJR新長田駅周辺では、震災後、復興区画整理事業、復興市街地再開発事業が進められ、並行して事業地内で、埋蔵文化財包蔵地として周知されている範囲での発掘調査の実施はもとより、包蔵地周辺においても新たな遺跡の拡がりや埋蔵文化財の存在を確認する目的で試掘調査を実施してきた。新長田駅南地区においては、復興市街地再開発事業第1地区で中世の集落遺跡である二葉町遺跡、第2地区では古墳時代の集落遺跡として著名な松野遺跡での調査を行い、また同地区では、中世を中心とする大橋町遺跡の発見、調査を実施した。そして第3地区では新たに発見された若松町東遺跡、平成20年度より、地区南部で新たに発見された大橋町東遺跡での調査を継続している。

若松町東遺跡については再開発ビルの建設開始に伴い、従前建物の移転、除却作業の進捗に合わせて埋蔵文化財の有無を確認する作業を行った。その結果、発掘調査は若松3第4・5・6工区及び若松4第1工区内における再開発ビル建設地と道路建設地を対象とし、従前建物の除却などが完了し、調査が可能な範囲より順次実施した。調査は平成19年度から23年度の5か年、6次にわたる調査となった。

表1 調査次数一覧

調査次数	調査面積	調査期間
第1次調査	1,215m ²	平成19年10月4日 ～平成20年3月14日
第2次調査	550m ²	平成20年4月16日 ～平成20年9月20日
第3次調査	940m ²	平成22年9月13日 ～平成22年11月22日
第4次調査	1,100m ²	平成22年11月29日 ～平成23年3月4日
第5次調査	400m ²	平成23年1月24日 ～平成23年3月17日
第6次調査	370m ²	平成23年5月10日 ～平成23年7月5日



図2 事業地地図

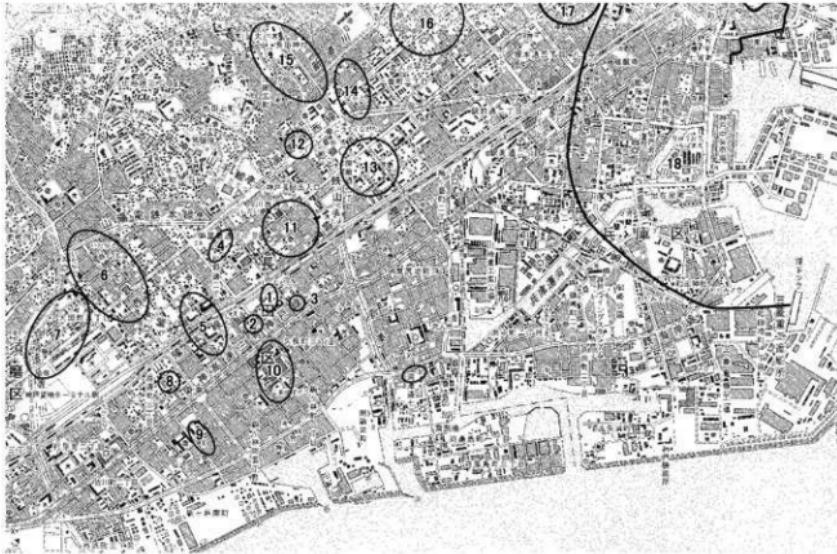


図3 周辺の主な遺跡

主要参考文献

1	若松町東遺跡	
2	大橋町遺跡	「大橋町遺跡 第1次～1～6次調査発掘調査報告書」 2006 神戸市教育委員会 「大橋町遺跡第2次調査発掘調査報告書」 2007 神戸市教育委員会
3	大橋町東遺跡	「大橋町東遺跡第1次調査」 平成20年度埋蔵文化財年報 2011 神戸市教育委員会
4	水笠遺跡	「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書」 2002 神戸市教育委員会 「水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査報告書」 2009 神戸市教育委員会
5	松野遺跡	「松野遺跡発掘調査概報」 1983 神戸市教育委員会 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」 2001 神戸市教育委員会 「松野遺跡第42～1・2・2次発掘調査報告書」 2010 神戸市教育委員会
6	戎町遺跡	「戎町遺跡第1次発掘調査概報」 1989 神戸市教育委員会 「戎町遺跡第15次調査」 平成8年度神戸市埋蔵文化財調査年報 1999 神戸市教育委員会 「戎町遺跡第35・38・50・56次調査 松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書」 2005 神戸市教育委員会
7	大田町遺跡	「神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書」 1993 兵庫県教育委員会 「大田町遺跡第2次調査」 平成3年度神戸市埋蔵文化財年報 1994 神戸市教育委員会
8	若松町遺跡	「若松町遺跡」 2000 神戸市教育委員会
9	長田野田遺跡	「長田野田遺跡第1次調査」 平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 1998 神戸市教育委員会
10	二葉町遺跡	「二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書」 2001 神戸市教育委員会 「二葉町遺跡発掘調査報告書第14～21次調査」 2008 神戸市教育委員会 「二葉町遺跡第22次発掘調査報告書」 2010 神戸市教育委員会
11	神楽遺跡	「神楽遺跡発掘調査報告書」 1981 神戸市教育委員会
12	御船遺跡	「御船遺跡第2次調査」 平成9年度神戸市埋蔵文化財年報 2000 神戸市教育委員会
13	御威遺跡	「御威遺跡第4・6・14・32次調査報告書」 2001 神戸市教育委員会 「御威遺跡第17・38次調査報告書」 2001 神戸市教育委員会 「御威遺跡V 第26・37・45・51次調査」 2003 神戸市教育委員会
14	五番町遺跡	「五番町遺跡」 平成6年度神戸市埋蔵文化財年報 1997 神戸市教育委員会
15	長田神社境内遺跡	「長田神社境内遺跡発掘調査概要」 1990 神戸市教育委員会 「長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書」 2008 神戸市教育委員会
16	上沢遺跡	「上沢遺跡発掘調査報告書」 1995 神戸市教育委員会 「上沢遺跡III 第38・46・50次発掘調査報告書」 2003 神戸市教育委員会
17	大開遺跡	「大開遺跡発掘調査報告書」 1993 神戸市教育委員会
18	兵庫津遺跡	「兵庫津II」 2002 兵庫県教育委員会 「兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査」 2010 神戸市教育委員会

表2 周辺の主な遺跡

1. 現地調査

各調査地内には建物基礎の解体後に均された整地土、盛土が堆積し、現地表下0.6～0.8mに中世の耕土層である灰色砂質土が堆積する。調査ではこの中世の耕土層直上までを重機により除去し、以後は人力による掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

検出遺構については図化・写真撮影により記録作業を行った。地上写真撮影により状況を記録するとともに空中写真撮影を実施し、調査区の全体図の作成を空中写真測量により1/20の精度で行い、調査の完了後に図化・校正作業を進め、第1次～第6次調査地の全体平面図を作成した。空中写真測量を実施していない遺構面、また遺物の出土した遺構や調査区の土層図については現地で1/20、1/10、1/5の精度で図化作業を行った。

2. 出土遺物整理・報告書作成

各年度の調査終了後より神戸市埋蔵文化財センター（西区西神中央公園内）において出土遺物の水洗作業を実施した。平成24年度に各次調査の遺構出土の遺物を中心にネーミング、接合作業、石膏補強や塗色復元を行い、報告書に記載する遺物について写真撮影を行った。遺構、遺物の検出状況を整理しながら報告書の作成を行った。



挿図写真2 調査作業風景



挿図写真3 遺物整理作業風景



挿図写真4 平成20年（2008）の事業地風景



挿図写真5 平成25年（2013）の事業地風景

3. 調査の概要

若松町東遺跡での調査は、事業の性格上、細かい区割りで調査を行い、遺構番号の統一が図りにくいなどの理由により、各年次の調査ごとに概要を記すが、隣接する地区についてはつながりを含めて概要を記し、確認された内容について、現状で把握できる様相をまとめて記すこととしたい。

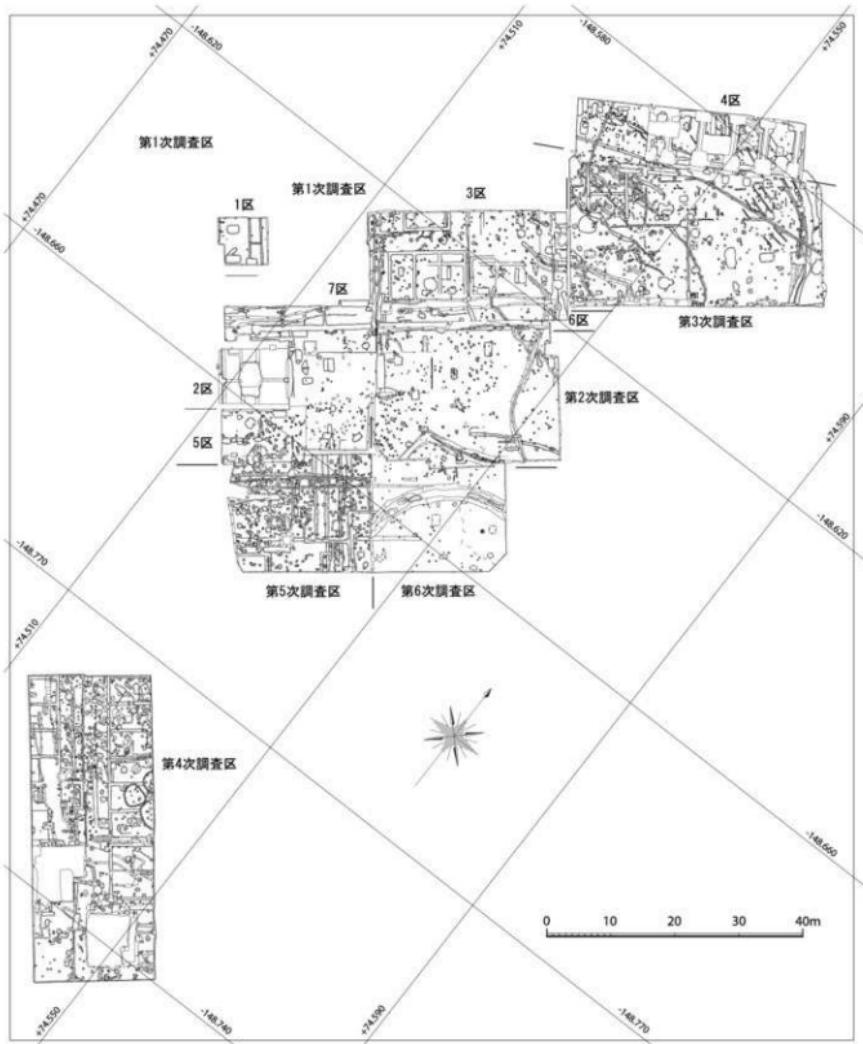


図4 第1～6次調査地 全体平面図

(1) 第1次調査

第1次調査は、若松3第5工区の再開発ビル建設地及び第4工区の道路拡幅部分で実施した。從前建物の解体、除却が完了し、調査が可能な箇所、範囲より順次着手した。したがって隣接する箇所もあるが、1～7区に分割して調査を実施した。

① 1区の調査

第1次調査地の北西部に位置する。近代～戦前の建物基礎や整地層下に近代の耕土層が存在し、その直下の灰黄色砂層面で土坑2基、溝1条、ピット数基を検出した。遺物包含層は認められない。

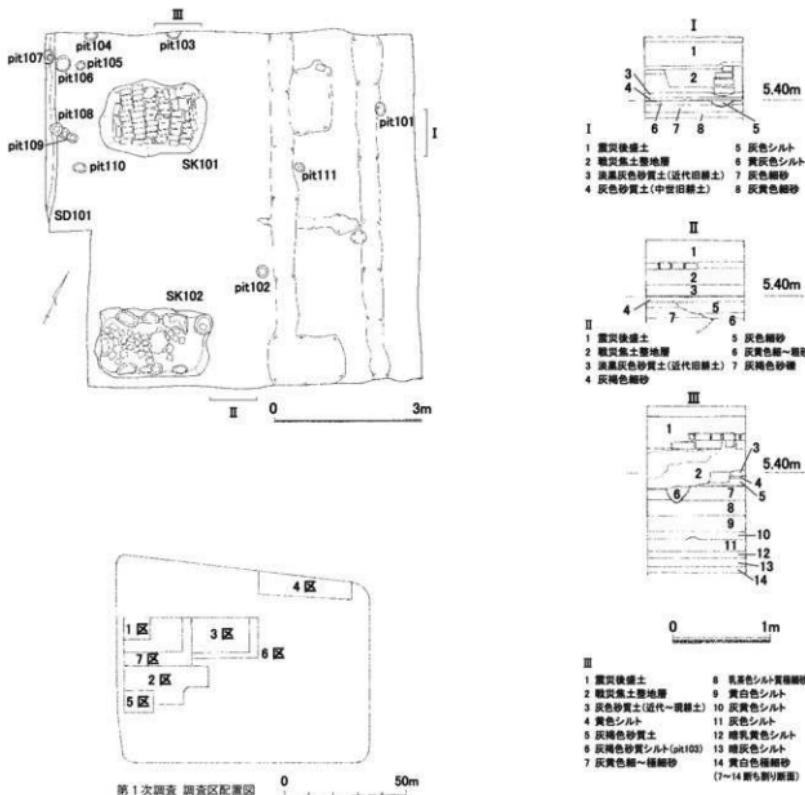


図5 1区平・断面図

土坑

SK101

長辺約1.5m、短辺約1.0m、平面形はやや隅丸を呈する平面長方形の土坑である。深さは約0.2mで、底に煉瓦が敷き詰めてある。煉瓦は約80個を数え、平の部分を上に向けて基本的に一段で置かれるが、東半で部分的に2段に積まれた箇所がある。また北東隅に径0.2m、深さ0.3mの穴が掘られ、小口を上に向けた4個の煉瓦が据え付けられていた。煉瓦にはモルタルなどは付着しておらず、未使用品と考えられるが、土坑の埋土にはモルタル片などが混入する。煉瓦は大半が210×110×60mmサイズかそれに準ずるものであるが、半羊や角の丸い異形煉瓦が含まれる。大阪窯業株式会社製、貝塚煉瓦株式会社製を示す刻印のほか、「山」、「ワ」、「+」、「K2」など社印、責任者印と考えられる刻印が認められる。

SK102

長辺約1.5m、短辺約1.0m、平面形はやや隅丸を呈する長方形の土坑で、深さは約0.2mである。土坑の規模や埋土の状況、約30数個の煉瓦が1段に敷かれた状態で出土した点などはSK101と同様であるが、煉瓦は大半が割れた状態で、完形品は数点にも満たない。またモルタルが付着したものも多い。

両土坑は建物基礎などとは考えにくいが、投棄土坑とするにはSK101において煉瓦が整然と並べられる点が気になる。

溝

SD101

調査区の西端で検出した南北方向の溝で、現在の町割と同一方向である。調査区内での検出幅は0.2mで、西側に拡がる。深さは0.1m、埋土は灰色シルトの単一層である。出土遺物は須恵器の小片がわずかに出土したのみである。

ピット

わずかに5基のピットを検出したのみである。ピットとしたのは直径約0.2m規模のもの、その他に直径約0.1mの杭状のものが多数穿たれている。Pit101から小片の土器片が出土したのみで、詳細な時期は不明である。ピットの埋土は大半が灰褐色粘質土の単一層で、杭状のものは黒灰色粘質土である。



挿図写真6 SK101



挿図写真7 SK102

② 2・5区の調査

第1次調査地の南西部に位置する。2区西端は從前建物の基礎により既に遺構面が大きく失われていた。遺物包含層は2区の調査区北側ではわずかに残る程度であり、南側に比較的厚く堆積するが、遺物の出土は少ない。2区北半及び5区西半で中世のものと思われる鋤溝や偶蹄目の足跡などの耕作痕を確認したが、あまり顕著な痕跡ではなかった。

その他に2区では土坑2基、溝1条、ピット約60基、5区は從前建物の基礎による搅乱が多いが、ピット約30基と土坑2基、溝1条を検出した。

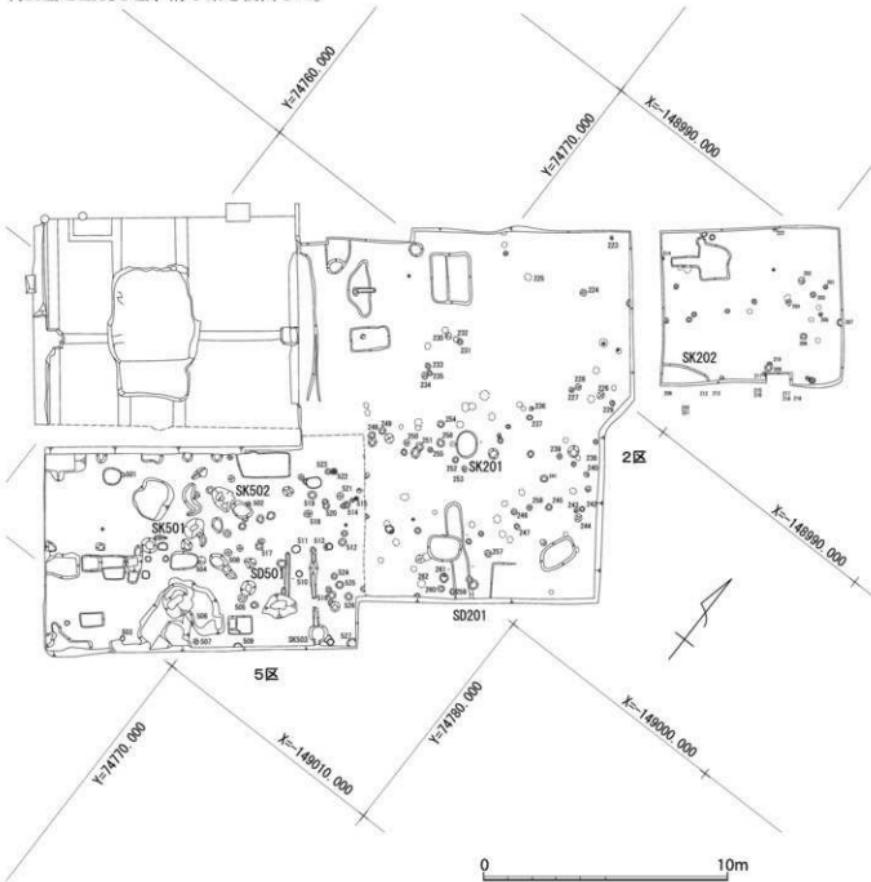


図6 2・5区平面図

土坑

径1.0m、深さ0.1m程度の浅い落ち込みが大半であり、遺物の出土も少ない。埋土は中世の耕土層と同様の灰色砂質土のものが多く、それらは上層の耕土層からの掘り込みであり、耕作に伴う痕跡の可能性が高い。遺物包含層に近い黒褐色系の粘質土を埋土とする土坑も一様に浅いものが多く、遺構面上の窪みに浅く堆積するものと思われる。

SK201

長径1.2m、短径0.9mの平面梢円形を呈する遺構で、深さは約0.05mと浅い。小片の土器が出土したが時期は不明である。

SK501

長径1.0m、短径0.7m、深さ0.4mの土坑で、埋土は灰色粘質土である。中世の須恵器、土師器片が出土した。

SK502

長径1.0m、短径0.7m、深さ0.5m、SK501と同規模の土坑である。埋土の上層は灰色粘質土で、下層には砂の堆積が認められる。中世の須恵器、土師器片の他、底から扁平な石の出土があった。

溝

SD201

調査区南側で検出した幅0.7~1.0m、深さ約0.1mの非常に浅い溝である。埋土は暗褐色粘質土である。精査時から小片ながら土器片が比較的多く出土しており、溝とすれば本来はもう少し深さが残っていた可能性があるが、凹地を形成していた可能性も多い。

SD501

幅約0.1m、調査区内での検出長は約2.0mである。溝底に鋤先が入ったような痕跡が僅かに認められる。鋤溝と考えられるが、並行する同様の溝は確認できなかった。埋土は黒褐色粘質土である。

ピット

直径0.2~0.3m、深さ0.2~0.3mの柱穴がほとんどである。2・5区で検出したピットを含めても周辺では建物は復元できていない。その他、柱痕跡をもち、掘形を丁寧に埋め戻した柱穴が数基存在するが、それら同様の埋土をもつ柱穴も建物としてまとまるものではなかった。また遺物が出土したピットも一様に浅く、底部に近いか、遺構面上に堆積した遺物の周辺が土壤化した痕跡である可能性が高い。



挿図写真8 2区基本土層

③ 3区の調査

第1次調査地の中央に位置する。盛土・搅乱層下の中世旧耕土は調査区全面に残るが、その下の遺物包含層は調査区の北側には存在せず、反対に南～南東側は厚く堆積する。その下の灰黄色砂質土～シルト層面で遺構を検出した。また調査区内の南東隅では遺構面は灰褐色シルト質細砂層により形成される。土坑8基、溝4条、ピット数十基を検出した。

土坑

SK301

長辺約2.0m、短辺約1.5m、平面形はやや隅丸となる長方形である。検出できた深さは約0.15mだが、遺構精査時より小片の土器片などの遺物が集中していた箇所で、本来はもう少し深さが残っていたと思われる。埋土は黒褐色粘質土の單一層で、小片の遺物が埋土全体に含まれ、北東部の底面近いレベルより小型の壺などが出土した。縄文時代晩期～弥生時代前期前半の遺構と考えられる。

SK302

2区調査区の東壁際、また隣接する6区の調査にかけて検出した土坑で、径約1.0mを測る。縄文時代晩期の突帯文土器が出土したが、いずれも小片である。

SK303

長径約1.5m、短径約1.0m、平面梢円形を呈する土坑で、深さは約0.1mである。埋土は黒褐色粘質土で、小片の土器片が出土した。

SK304

直径約1.3mの土坑で、深さは約0.1mである。埋土は灰褐色砂質土で、小片の土器片が出土した。

SK305

直径約1.3m、深さ約0.1mの平面円形を呈する土坑で、規模、埋土の状況などはSK304に似る。小片の土器片とともに砥石の可能性のある扁平な石が出土した。

SK306

直径約0.5m、深さ約0.4m、埋土は上層が暗灰色を基調とするシルト層で、下部は細砂層の堆積となる。砂層中には炭の混入が認められる。規模的には周辺のピットよりやや大きい程度であるが、椀状となった断面の形状などから土坑とした。出土遺物は小片の弥生土器と思われる破片、サヌカイト片が出土した。この土坑の周辺には破片ながら、比較的多くの土器片の出土する浅いピットの分布が認められる。

SK307

壺の上半が倒立した状態で出土した直径約0.4mの平面円形の土坑である。鉢の検出レベルから底面までの深さは約0.2mである。

SX301

調査区西端で検出した直径約0.6mの土坑で、鉢を埋納した遺構である。鉢の内部の埋土は褐色砂質土で、土器の周囲の埋土は暗灰色、または灰褐色のシルトである。縄文時代晩期の遺構と考えられる。

溝

SD301

幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.1mの溝で、調査区内での検出長は約4.5mである。北側に延びるもの、ごく浅く収束する可能性が高い。SK304の埋土を切り込む。弥生土器片と思われる小片が出土した。

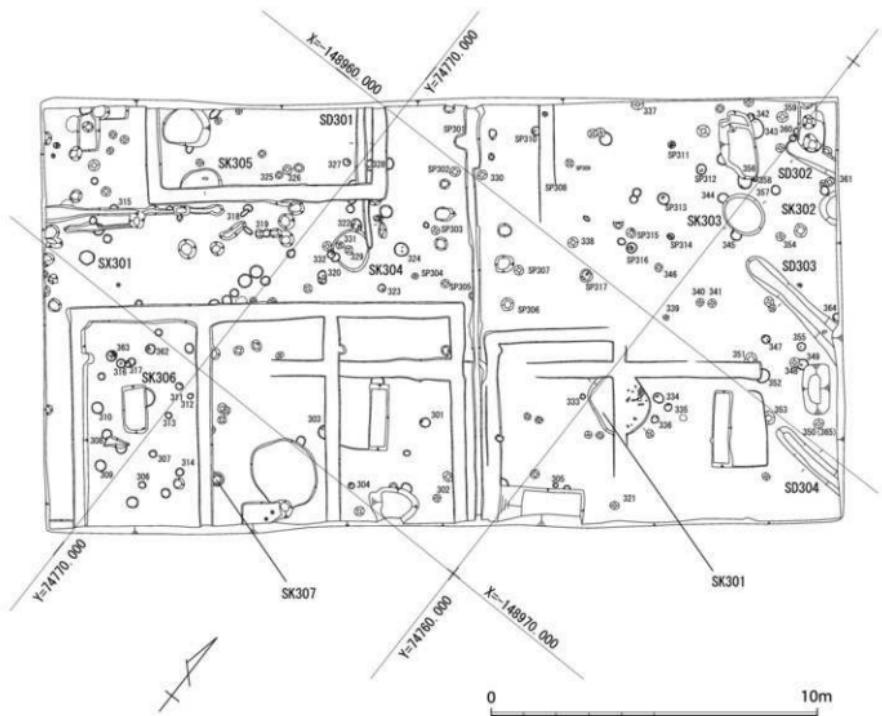


図7 3区平面図



挿図写真9
3区全景(東から)

SD302

幅約0.6m、深さ約0.1mの溝である。埋土は暗灰褐色シルト層で、土器片が出土したが小片である。

SD303

幅約0.6m、深さ約0.2mで、埋土は暗灰褐色シルト層である。断面の形状はやや緩やかなV字形である。出土した土器片の数は多いものの、いずれも小片である。

SD304

幅約0.5m、深さ約0.2mの溝である。埋土は上層が灰褐色砂質シルト、下層が暗褐色シルト層である。出土遺物は小片でわずかである。

ピット

3区でも多くのピットを検出した。大半は直徑0.2~0.3m、深さ0.1~0.3mの柱穴で、埋土は（暗）灰褐色系の色調を呈する粘質土である。その他に小片ながら比較的遺物が出土する直徑0.4~0.5mのやや径の大きなものがあるが、いずれも浅いもので、柱穴であるのか疑問が残る。また柱穴としたものの中には黒褐色シルト層の單一埋土の杭の周囲が土壤化し、遺構検出時に柱痕を残す柱穴と認識したものが多い。

ピットからの出土遺物は全般に少ないが、調査区南西部のSK306の周辺と、調査区北東部で検出した一部のピットからは今回の調査においては比較的大きな破片といえる土器の出土が見られた。また掘立柱建物として、調査区中央から北側で検出した3間×3間の側柱(SP301~310)のみで構成される建物の存在が推測される。ピットからの出土遺物は弥生時代のものと推測される。

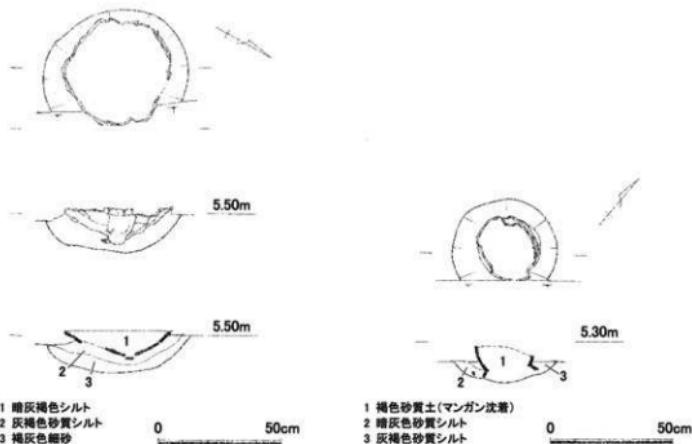


図8 SX301 平・断面図

図9 SK307 平・断面図

④ 4区の調査

若松3第4工区の北部、現在確認されている若松町東遺跡の北東端に位置する。震災後の整地層、近代～戦前の建物基礎、整地層の下に近世～近代、中世の旧耕土が堆積し、弥生時代～中世の遺物が含まれる遺物包含層の暗灰褐色粘質土が堆積する。この層下面の灰黄色または褐黄色砂質土～シルト層面が遺構面である。調査地の東半分は従前の建物の基礎が遺構面以下まで達しており、除却に伴う遺構の損壊を勘案し、調査中はこれら基礎を残して調査を実施した。

検出した遺構は掘立柱建物3棟、ピット多数、溝18条、土坑8基である。

掘立柱建物

SB401

調査区東端で検出した建物で、東西3間、南北2間以上の総柱の建物と考えられる。柱間は2.0～2.4mとややばらつきがあり、東から2列目の柱列など現代の建物基礎により既に失われている部分も多く、建物の構造を把握する上で不明な部分が多い。北側から2列を構成するSP401・402・405などは径0.4m、深さ約0.4mで、土層断面からは径0.2mの柱痕跡が確認された。南側の列の柱穴は径0.2m、深さ0.2～0.3mで、やや規模は小さい。遺物は小片であるが須恵器・土師器のほか黒色土器片が出土しており、平安時代の建物と考えられる。

SB403

東西2間、南北3間以上の建物である。柱間は2.0～2.5mで、柱の規模は径約0.3m、深さは0.2～0.4mである。柱痕跡を残すものが4基ある。建物の西側に1間分、径約0.1m規模のピットが並行しており、西に1間分拡がる可能性もある。埋土は灰褐色粘質土で一部に炭の混入が認められる。須恵器・土師器のほか黒色土器片が出土しており、平安時代の建物である。

当初SB402とした調査区の南西端で検出した柱列は、後述の第3次調査区には続かなかった。柱間は約1.8m、柱の径はいずれも約0.2m、深さは0.2～0.4mで、黒色土器の小片が出土した。建物、または溝に沿う柵(SA02とした)のようなものと想像される。

溝

SD401

幅約0.9m、深さ約0.15mの溝である。埋土は灰色砂質土で、上層の中世旧耕土層に似る。小片の須恵器、土師器、弥生土器とサヌカイト片が出土した。

SD402

幅約0.7m、深さ約0.1m、中世の須恵器、土師器、黒色土器、弥生土器、サヌカイト片が出土した。SD401に並行する溝であるが、埋土は暗灰色シルト層でやや状況は異なる。

SD403

幅0.2m、深さは約0.1mである。SD401・402に並行する。埋土は黒褐色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

SD404

調査区の東端で検出した幅約1.3mの東西方向の溝で、北側に膨らみ僅かに弧を描く。調査区内での検出長は約12mである。深さは0.15～0.2mで、埋土は黒褐色シルトの単一層である。

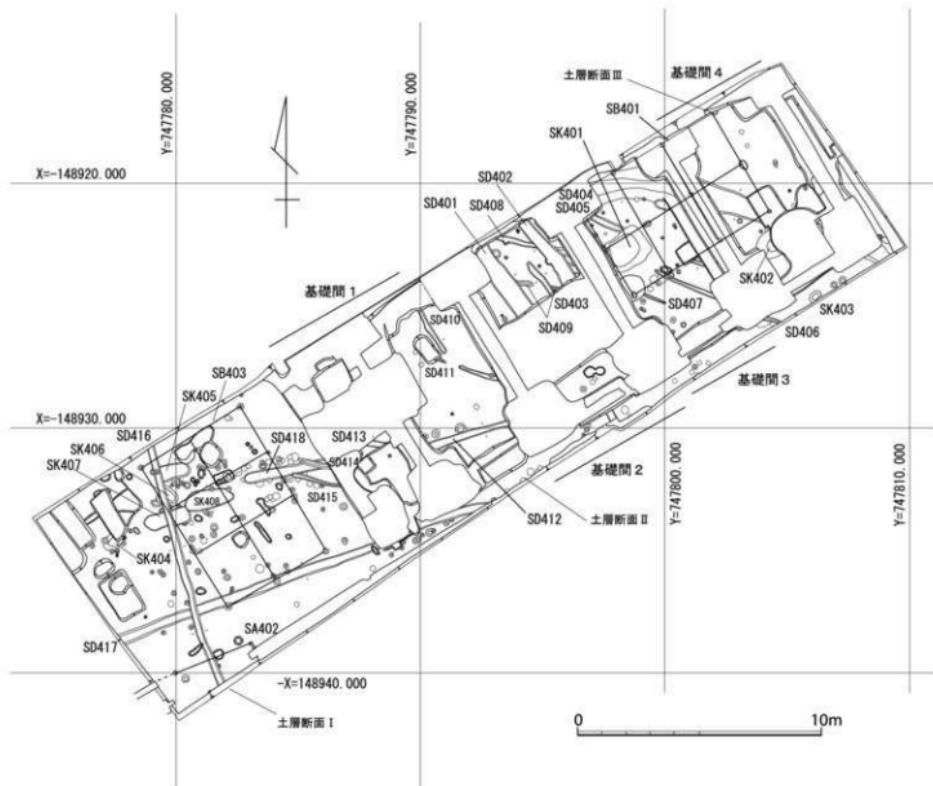


図10 4区平面図

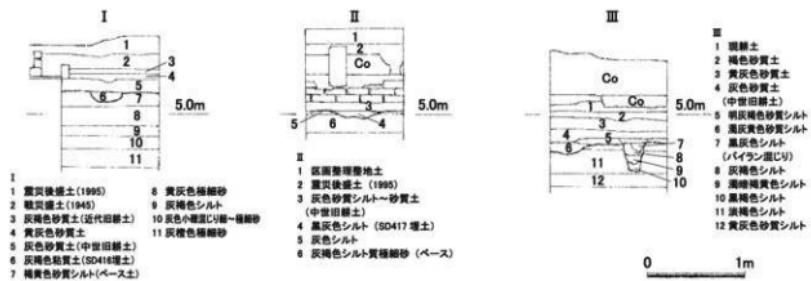


図11 4区基本土層図

SD405～415

黒褐色シルトを埋土とする幅0.15～0.2m、深さ0.1mの溝で、東西方向で並行する。出土遺物のほとんどは微細な弥生土器片であるが、SD413から古墳時代末頃と考えらえる須恵器片が出土しており、周辺の遺跡で検出される同様の溝の状況からも古墳時代～奈良時代の鋤溝の可能性が高い。

SD412

幅0.3m、深さ0.15m、暗灰色～褐色のやや砂質のシルトを埋土とする。ここではわずかにサヌカイト片が出土したのみである。

SD416

調査区西側で検出した南北方向の溝で、幅約0.3m、深さ約0.1mである。埋土は灰褐色粘質土である。弥生土器のほかに土師器と考えられる破片が出土した。

SD417

調査区西側で検出した東西方向の溝で、幅0.4～0.5m、深さ約0.15mを測る。埋土は灰褐色粘質土で、弥生土器、サヌカイト片が出土した。

SD418

幅0.4～0.5m、深さ0.2mの溝である。溝の埋土の中間に遺構面基盤層である灰黄色砂質土を貼り付けたような痕跡が確認された。この貼り土状の堆積の下からはサヌカイト片が比較的多く出土したが、それらに混じり、古墳時代後期のものと考えられる須恵器片が出土した。溝の底部両端に窪みがあり、暗灰色シルトが堆積する。溝の下層に堆積する砂はSK408の下部にも続いていることから、鋤溝のような耕作痕と考えられるが、土坑との関連などは不明である。

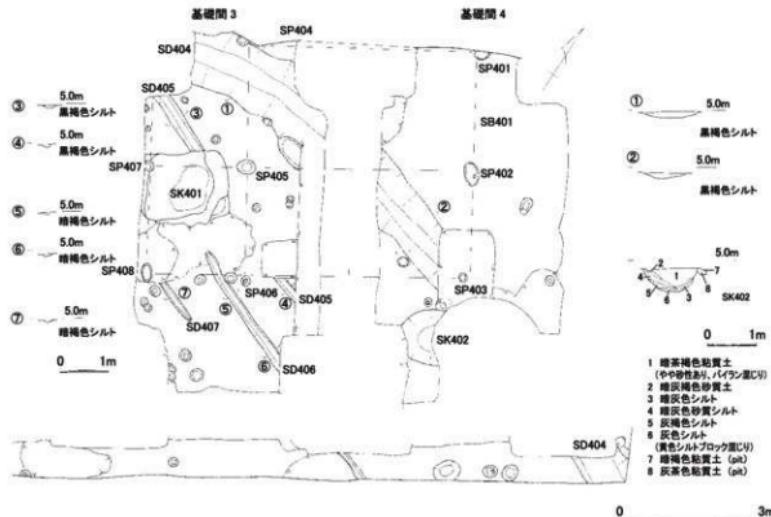


図12 4区 基礎間3・4 平面図

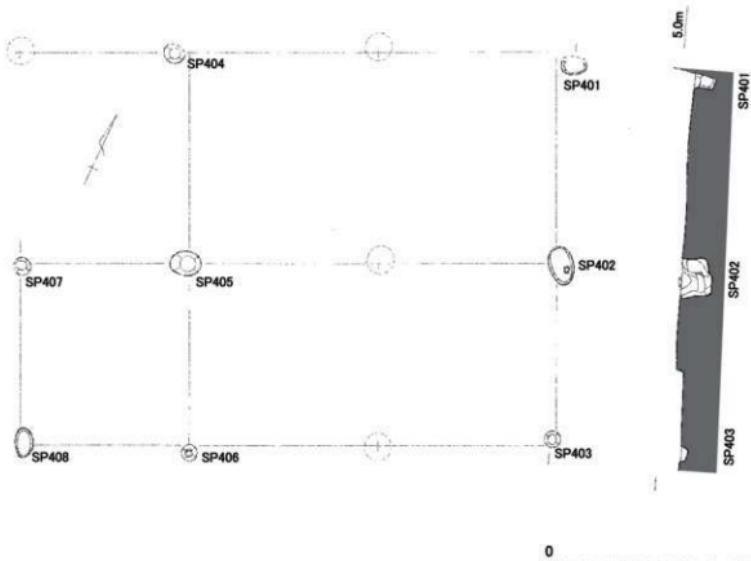
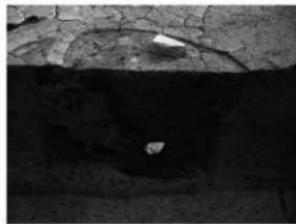


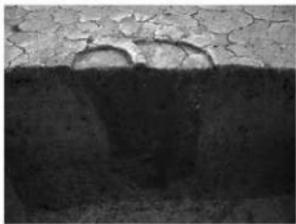
図13 SB401平・断面図



挿図写真10 4区南東部 SB401周辺近景（東から）



挿図写真11 SB401 SP402



挿図写真12 SB401 SP405

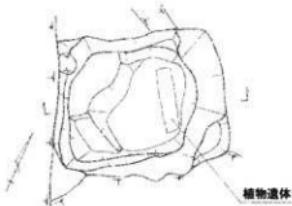
土坑

SK401

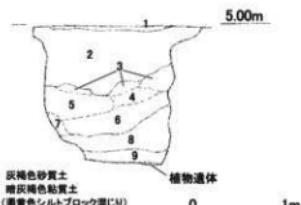
長辺約1.8m、短辺約1.3m、平面形はやや隅丸を呈する長方形で、深さは約1.4mである。断面の形状は上方から緩やかに落ち込み、下から2／3はほぼ垂直に立ち上がる撥状である。土坑底の西側の部分は底面からの高さ約0.2mを掘り残し、段になっている。底面からこの段の高さまでは灰色～暗灰色シルト層が堆積し、水が溜まっていた状況と考えられ、植物遺体層が形成される。それより上層の埋土には基盤層である灰黄色砂質土がブロック状に混じり、一時に埋め戻されたものと推測される。遺物はほとんど出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、SB401を構成する柱穴が、土坑の埋土を切り込んでおり、平安時代か、またはそれ以前の素掘りの井戸、あるいは水溜め状の遺構と考えられる。



挿図写真13 SK401土層断面



挿図写真14 SK401検出状況



- 1 灰色砂質土
- 2 暗灰色粘質土
(黒褐色シルトブロック混じり)
- 3 灰色粘質土
- 4 黑褐色砂
- 5 黄白色シルト
(黒褐色シルトブロック混じり)
- 6 灰色砂質土
- 7 灰色シルト
- 8 淡灰色シルト
- 9 灰色砂質シルト

図14 SK401平・断面図

SK402

擾乱により大半が失われているが、径約1.2m、深さ約0.5m、平面円形を呈する土坑である。埋土は暗灰色～灰褐色のシルト層を基調とするが、埋土の上方は砂質が強く、基盤層の灰黄色砂質土をブロック状に含む。弥生土器と考えられる破片が出土したが、小片であり、詳細な時期は不明である。

SK403

南東隅で検出した径約0.6m、深さ約0.1mの小規模な落ち込みである。遺物は出土していない。

SK404

擾乱により一部が失われているが、一辺約0.7mの平面正方形の土坑である。断面の形状は浅い皿状で、埋土は灰褐色シルト層である。遺物は出土していない。

SK405

長さ約1.5m、幅約0.6m、深さ約0.2m、平面形はやや丸みを帯びた長方形を呈する。埋土は黒褐色シルトで弥生土器片とサヌカイト片が出土した。

SK406

長さ約0.8m、幅約0.4m、深さ約0.15mの土坑で、平面形はやや丸みを帯びた長方形である。出土遺物は弥生土器の細片がほとんどを占めるが、底面から古墳時代と考えられる須恵器片が出土した。

SK407

長さ約2.1m、幅0.7mの平面長方形の土坑である。深さは約0.3mで、埋土は灰褐色系のシルト層、下半はやや砂質が強い。弥生土器片とサヌカイト片が出土した。

SK408

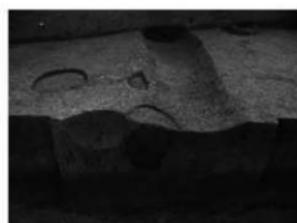
長辺約2.0m、幅約0.8m、平面形は丸みを帯びた長方形である。埋土は暗褐色粘質細砂で、遺物は出土していない。

ピット

建物を構成する柱穴以外にもピットを多数検出したが、前述の3棟以外の建物、柱列を推定するに至っていない。その他のピットの規模は径0.2m前後、深さ0.2m以下のものが大半で、建物を構成する柱穴より規模的には小さい。建物を構成する柱穴からは平安時代の土器が出土するものの、大半は縄文時代晩期、または弥生時代前期と考えられる破片であり、これら遺物の出土の少ない柱穴の時期についても明確ではない。



挿図写真15 SA402 断ち割り状況



挿図写真16 SA402 SP410 断面

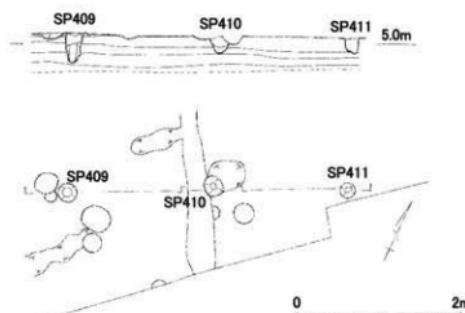


図15 SA402平・断面図

⑤ 6・7区の調査

3区に隣接する元の道路部分の調査区で、埋設管などによる攪乱は多いものの旧耕土、床土が残り、その下で遺物包含層を確認した。遺物包含層は2層に分かれ、上層が淡黒色、下層が暗茶褐色のシルト質の極細砂層である。遺物からは縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代、平安時代後期の土器や弥生時代の石器やサヌカイト片が出土している。6区で検出した遺構は土坑7基、溝3条、ピット約40基、7区の検出遺構は土坑4基、ピット約20基である。

土坑

検出した土坑はほとんどが深さ0.1m前後の浅いものである。

SK601

調査区の北端で検出した長径1.05m、短径0.6m、深さ0.2mの平面梢円形の土坑である。埋土は上層が暗茶褐色シルト質極細砂、下層が暗灰褐色シルト質極細砂である。縄文時代晩期の突帯文土器が出土した。

SK604

調査区の東壁際で検出した長径2.1m、短径1.8m、深さ0.11mの平面梢円形の浅い土坑である。埋土は暗茶褐色シルト質極細砂層である。

SK703

SK702の北側で検出した円形の土坑である。直径は1.4m、深さは0.14mである。埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。縄文時代晩期の突帯文土器の小片が出土した。

SK704

SK703の北側で検出した長径1.2m、短径0.7m、深さ0.2mの平面梢円形の土坑である。埋土は上下2層に分かれ、上層は茶褐色シルト質極細砂、下層は淡茶褐色砂質シルト～中砂である。

溝

SD601

3区 SD303から続く溝で、本調査区内では若干北に曲がりながら東方向に向かう。後述する第3次調査SD23に続く。幅は2.0mで、断面の形状は肩部から緩やかに下がり、中央部がさらに一段落ちる漏斗状の形状である。溝の深さは0.35mで、埋土は上層が粗砂、小礫混じりの暗茶褐色シルト質極細砂、中層は茶褐色シルト質極細砂、下層は中砂混じりの暗灰褐色シルト質極細砂で拳大の礫が底部付近で出土している。縄文時代晩期の突帯文土器片、サヌカイト片、片岩が出土した。

SD602

SD601と同様に3区 SD304から続く溝で、西方向から南方向に弧を描き、第2次調査区 SD801へと続く。幅は0.7～0.9mで深さは0.2m。断面形は楕状を呈する。埋土は上下2層に分かれ、上層は中砂混じりの暗茶褐色シルト質極細砂、下層が暗灰褐色シルト質極細砂である。

SD603

調査区の中央部で検出した溝で、北から東に方向を変えながら第2次調査 SD802となる。幅は0.5～0.6mで、深さは0.3m。逆三角形の断面形をしている。埋土は上下2層に分かれ、上層は粗砂混じりの暗灰褐色シルト質極細砂、下層が暗青灰色極細砂～粗砂である。

検出したピットは直径0.2m～0.3m、深さ0.1～0.2mのものが多い。出土遺物は少なく、遺物が出土したピットも一様に浅く、底部に近いか、遺構面上に堆積した遺物の周囲が土壤化した痕跡の可能性も多い。

3区も含めて建物の柱穴として纏まるものは確認できなかった。

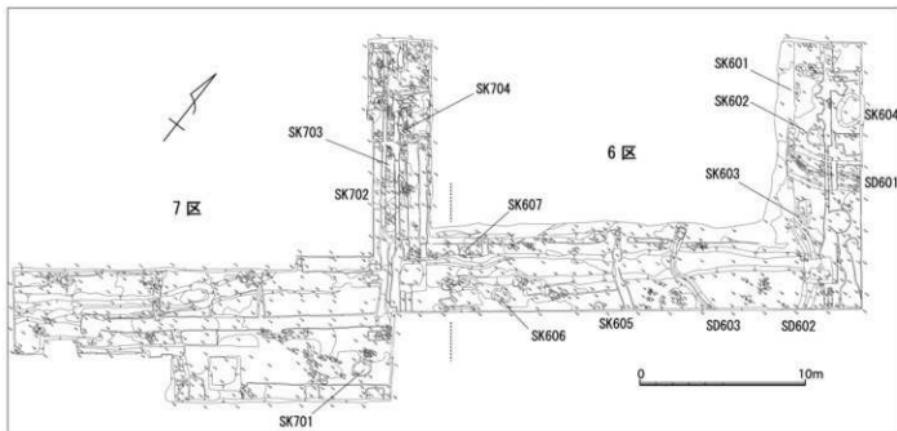


図16 6・7区平面図

⑥小 結

全般に遺物の出土量が乏しく、それぞれの遺構の正確な時期については不明な点が多いものの、縄文時代晚期～弥生時代前期、平安時代頃の集落がこの地に形成されたことが明らかになった。

1区や5区などの西寄りの調査区は、周囲よりも少し高い地盤であるが、遺構面上に帶状に現れた砂礫層からは湧水があり、調査区西側での試掘調査の結果、湿地状の堆積が確認されるなど、元々、地盤は軟弱で、安定していなかったかと推測される。

調査地北方の4区から3区、2区東半、5区東半にかけての部分ではピットを中心とした遺構を検出した。南に位置する第5次調査区では掘立柱建物を9棟復元しており、居住域に隣接する遺構の痕跡と考えられる。

3区から6区にかけては第1次調査地の中で特に遺構の分布が密な地区で、多数の柱穴や溝、土坑を検出した。遺構からの出土遺物が少なく、出土したものも小片多いため、詳細な時期は明らかでないが、遺物包含層の様子を勘案すると縄文時代晚期～弥生時代前期の可能性が高いと推測される。本来は調査区の北側にも遺構の抜がりがあったと想像されるが、地形的に高いため後世の削平により失われたのであろう。

南側の6区、7区では検出した土坑はSK601を除き、いずれも浅い凹状のものである。3区から続く溝の出土遺物も、土器はいずれも小片ながら縄文時代晚期突帯文の時期のものと確認でき、サヌカイト片や片岩の出土も顕著である。溝は北側の高位では確認できず、微高地からやや下がり地形となる箇所から溝が掘削され、遺物も比較的溜まりやすい場所であったと推測される。

4区では平安時代の掘立柱建物3棟の検出をはじめ、古墳時代～奈良時代のものと考えられる鋤溝、弥生時代と考えられる溝や土坑を検出し、新たな集落域や生業域の存在が明らかになった。中世の耕作痕も確認でき、周辺に同時期の遺構が抜がる可能性があるが、削平などの影響もあり、不確定な要素が多い。

(2) 第2次調査の概要

調査区内の基本土層は、G.L.-0.4mまでが震災後の整地層、戦災に伴う整地層で、その下が近世～近代の耕土層、中世耕土層で、中世耕土層は調査区全域に広がる。耕土層の下に土壤化した暗褐色シルトが薄く堆積し、この下の灰黄色、あるいは黄色を呈するシルト層面で遺構を検出した。調査区の東側では下がり地形となり、土壤下層の下、遺構検出面との間に黒褐色シルトが堆積する。

検出遺構は掘立柱建物1棟、土坑（落ち込み）4基、溝7条、柱穴多数である。

掘立柱建物

SB801

調査区中央、8-2区で検出した1間×1間の建物である。柱間は東西2.2m、南北2.1mである。柱穴掘形の径は0.35～0.4m、深さ約0.5mで、土層断面では柱があった痕跡が確認できる。柱は径0.1～0.15mで、痕跡からは柱が抜き取られたものか、または朽ちたものかは明らかではない。北側の2基に改修の可能性のある柱穴の切り合いが認められる。遺物はSP802・804から弥生土器と考えられる小片と、同じくSP802から礫が1点出土した。

土坑（落ち込み）

SK802

第1次調査2区で一部を検出して落ち込みで、双方を合わせると平面楕円形、長径3.0m、短径2.0mの規模となる。深さは0.1～0.2mで、埋土は褐色砂質シルトを基調とし、黒褐色、あるいは灰色シルトがブロック状に混じる。

その他、SX801、SK801～803の4基を土坑としたが、いずれも遺構検出時に周囲とは異なる堆積の輪郭が認められたが、掘削の結果からは明確な落ち込みとはならず、浅い窪み程度であった。SK801の底部では径0.1mの杭状の輪郭を多数検出しておらず、検出時の周囲との土色、土質の差異はこれら杭の集中する部分が土壤化したもので、その他の遺構も同様に軟弱な地盤が土壤化した部分であった可能性が高い。SK802から小片ながら遺物が出土したもの、その他の土坑からは2～3点の土器片が出土したに留まる。

溝

SD801

第1次調査3区で検出したSD301、6区で検出したSD602に続く一連の溝である。今回の調査での検出長は約25mで、先の調査での検出分を合わせると約34mとなる。溝の断面の形状は浅い漏斗状で、上端幅は約1.0m、下方のやや鋭角に掘り込みのはじまる部分の幅は約0.4mである。溝の深さは0.2～0.4mで、北西から南東方向へわずかに蛇行しながら深みを増して流れれる。溝からの出土遺物はほとんどないが、8-1区南端でわずかに土器片や礫の集中する箇所がみられた。調査区内の堆積層に礫が混じらないことから搬入礫と考えられる。礫は亜角礫から円礫の自然石で、いずれにも顕著な加工痕や擦痕はなく、被熱状況も認められない。出土土器はいずれも摩耗がひどく、詳細な時期は不明である。また溝の輪郭精査時に土器片、礫の出土した範囲の上層からサヌカイト製の尖頭器が1点出土した。

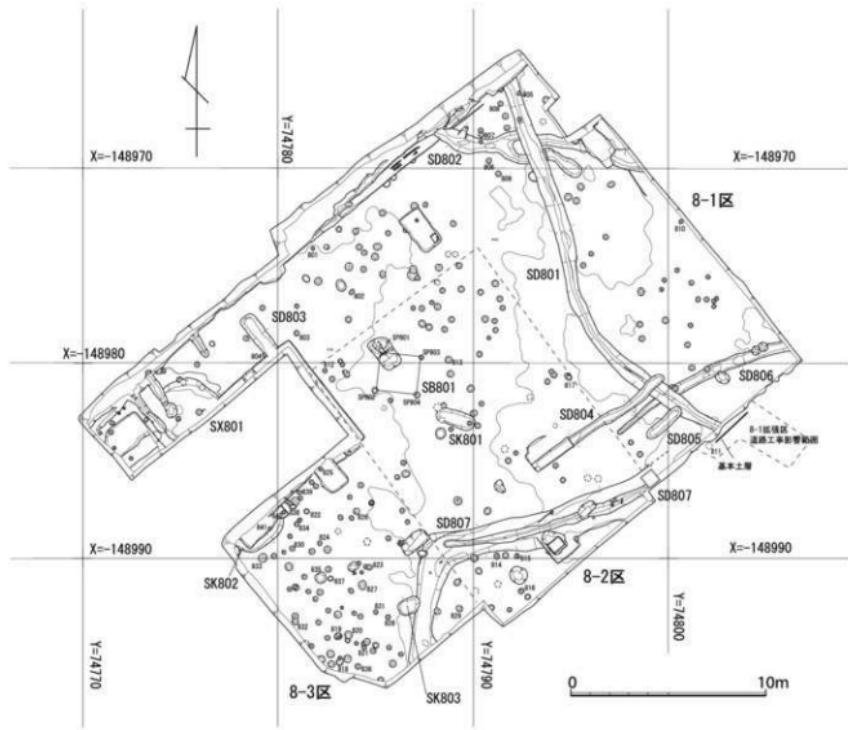


図17 8区平面図及び基本土層図

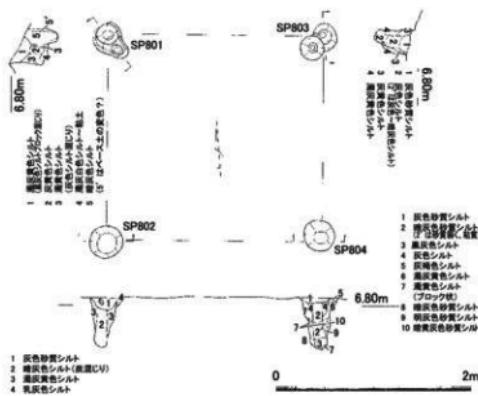


図18 SB801 平・断面図

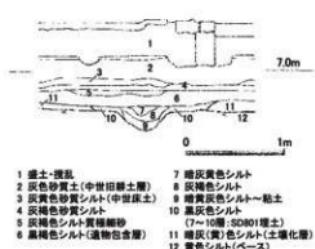


図19 8-1区基本土層図

SD802はSD801に切られる溝で、西から東へと流れる。第1次調査6区で検出したSD603と同一の溝で、今回の調査区内での検出長は約11m、一連の調査での検出長は約18mとなり、東にさらに延びる。SD801と交差する部分で二股に分かれ、南側の1条は分かれた後、長径1.0mの平面橢円形の浅い土坑状となり収束する。溝の埋土は上層には粗い砂が堆積し、下層には砂質の強いシルトが堆積する。遺物は小片の弥生土器と思われるもの、サヌカイト片が出土した。

SD807

調査地南端で検出したSD801に切られる東西方向の溝で、SD801はSD807の流れを伝い南東に延びる。SD807は西側8-3区まで続き、南に曲がり調査区外に延びる。最大幅約2.0m、南西側では深さ0.1m、東側は0.4mである。出土遺物は少ないが、検出範囲の中央付近や東寄りでSD801と同様、わずかに土器と礫の集中する部分を確認した。

SD807に並行し、同じくSD801に切られる溝SD806や、SD801に直交し、これを切り込むSD804、805を検出したが、いずれも深さは0.1mと浅い。削平を受けていたか、あるいは検出時に土壤化層との明確な区別ができず、検出面を下げ過ぎた可能性がある。なお、SD804とSD801の切り合い確認中にSD804の先端で、幅わずかに1.0cmで、溝幅の長さの長方形の輪郭を検出した。板状のもので流し込む水を調整した痕跡かと推測される。状況確認のために断ち割り調査を行ったがすぐに消えてしまい、詳細は不明であるが、これら溝が一連のものであった可能性を残す。

この他8-1区西側で検出したSD803は長さ約2.5m、幅0.9m、深さ0.1mの溝で、遺物は出土していないが、灰色砂質土の旧耕土層と同様の埋土であることから、中世の遺構かと考えられる。

ビット

調査区内で多くの柱穴や径0.1mほどの杭状のビットを検出したが、建物や明確な柵列状の遺構には復元できなかった。柱穴としたものは大半が径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2m程度で、規模はさほど大きいものではない。径0.3m以上、深さ0.3mほどの掘形の明確な柱穴も散見されるが、ほとんどは単一埋土で、柱の痕跡や規模などは不明瞭である。出土遺物も極わずかである。

小 結

第1次調査区から続く遺構の検出を進め、1間×1間の規模ながら掘立柱建物1棟が復元できた。その他にも柱穴や杭状のものは多数検出されるが、明確な構造物としては把握できなかった。いずれの遺構からも出土遺物が乏しく、明確な時期を決定しづらいが、遺構面直上の土壤化層やわずかな出土遺物からすると、検出した遺構の大半は弥生時代前期頃と考えられ、その他は灰色砂質土の旧耕土層と同様の土を埋土することから中世の遺構と判断される。

今回の調査地西半、第1次調査の2区寄りの範囲で比較的掘形の形状が明確で、深さ0.3m以上の規模の柱穴が散見される。建物に復元できた柱穴もここに位置する。調査区の南東側へは緩やかな下がり地形となり、SD801などの周辺で検出したビットはいずれも径が小さく、杭状のものと思われる。

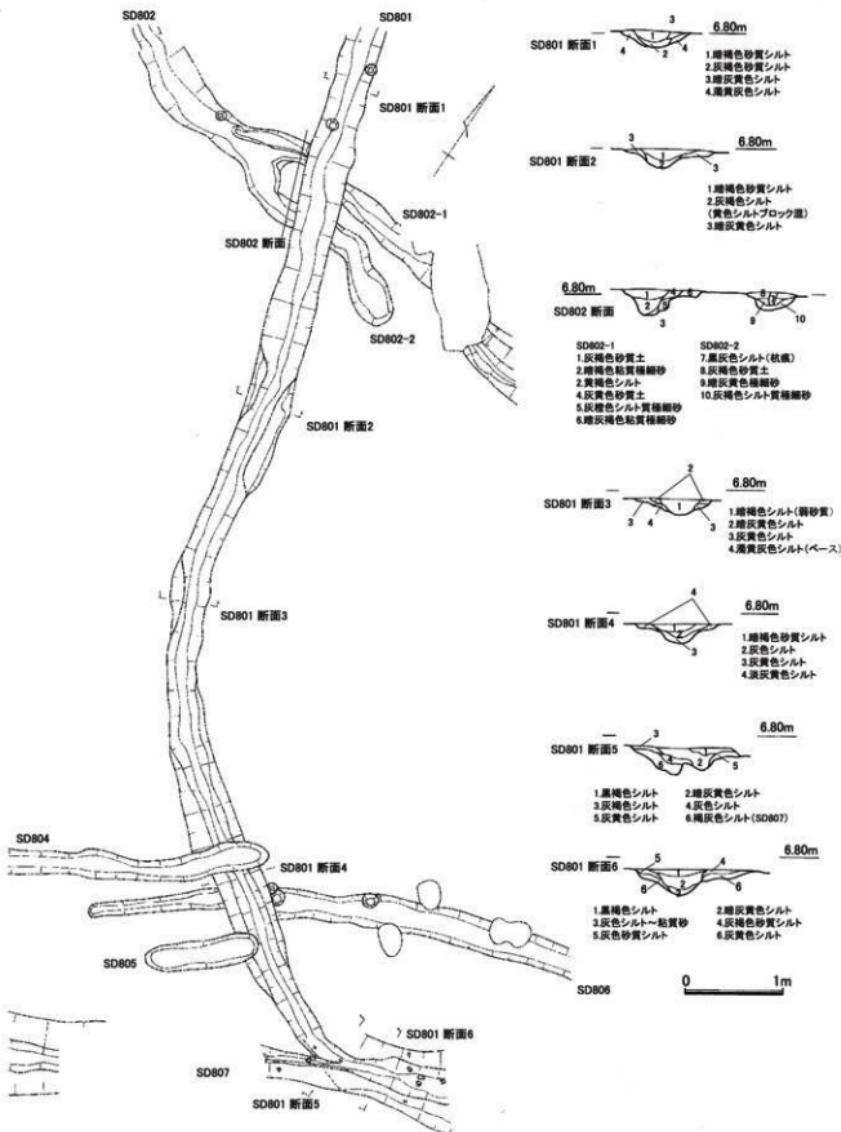


図20 SD801～807 平・断面図

(3) 第3次調査の概要

調査の結果、縄文時代晩期から弥生時代前期と平安時代の柱穴、溝、土坑を確認した。

調査区内の基本層序は、盛土、現耕土層の下層に中～近世にかけての2～3層の旧耕土層が存在し、その下層に遺物包含層である灰褐色シルト質細砂および暗褐灰色砂質シルトが堆積している。遺物包含層は北側にはほとんど存在せず、南東方向に向かって徐々に堆積が厚くなっていく。また調査地南西隅でも堆積が厚く、0.2m程度の厚さがある。遺物包含層の下層の濁茶灰色砂質シルト、乳黃灰色～黃褐色シルト質細砂の上面が遺構面となっている。現地表面から遺構面までの深さは北側で0.8m前後、南側で1.0m前後である。ただし、安定した堆積ではなく、所々に洪水砂と考えられる灰色及び暗褐色砂礫層が堆積している状況が見られる。遺構面以下については、洪水砂以外の部分では暗灰色系と乳黃灰色系のシルトの水平堆積が遺構面下1.5m近くまで見られた。

土坑

21基の土坑を検出した。形状はやや崩れた楕円形を呈するものが多く、全長は、1.0～2.0m、深さは0.1m前後である。埋土は暗灰褐色系の色調を呈し、上層の遺物包含層と類似している。SK05からは片岩と砂岩の円礫が数個並べ置かれた状態で出土した。またSK21から小型の太型蛤刃石斧が出土した。石斧は刃部の一部、基部側が欠損している。

落ち込み

不整形な落ち込みを7箇所で検出した。いずれも土坑と同様に0.1m前後の浅いものであった。埋土からは弥生土器と考えられる土器細片が出土している。

溝

調査区内の東西両端において大小26条確認している。

調査区東側で検出した、やや北に振る東西方向の溝群は、おおむね幅0.2m、深さ0.1m、埋土は暗灰色砂質シルトである。土師質の小片の土器が出土したが、時期が判断できるものは確認されていない。いくつかの溝の底部には幅0.2mほどの鋤跡と考えられる痕跡を確認しており、耕作痕と考えられる。

これらの溝の間を縫うように掘削される真東西方向の溝SD04は、検出長約26.0m、幅約0.4m、深さ約0.15mである。埋土は暗灰褐色砂質シルトで、土師質の土器片が出土している。第1次調査4区での検出部分を合わせると検出長は30m以上となる。ほぼ直線的に掘削されており、区画溝のようなものと推測される。

また東端で検出したSD01は、やや東に張り出すように弧を描く南北方向の溝で、検出長約18.0m、幅1.0～1.6m、深さ0.3mを測る。溝の東肩の立ち上がりは緩く傾斜し、中央部分がやや深くなる。埋土は黒灰色シルトで、弥生土器、突帯文土器、サヌカイト片が出土している。この溝も北側の第1次調査4区に続き、検出長は30mに及ぶ。

一方、調査区西半では、北側を中心に蛇行する溝が多く検出された。規模は幅約0.3m、深さ0.05～0.1mで、埋土は粗砂が混じる淡茶灰褐色シルト質極細砂である。わずかに弥生土器と考えられる土器片が出土した。南側では、西部でL字状に南に曲がる溝SD23を検出した。第1次調査6区検出のSD601に続く溝で、第3次調査区では部分的にランク状に折れ曲がる。両調査区での検出長は約25.0mとなる。縄文時代晩期～弥生時代前期かと考えられる土器の小片が出土した。

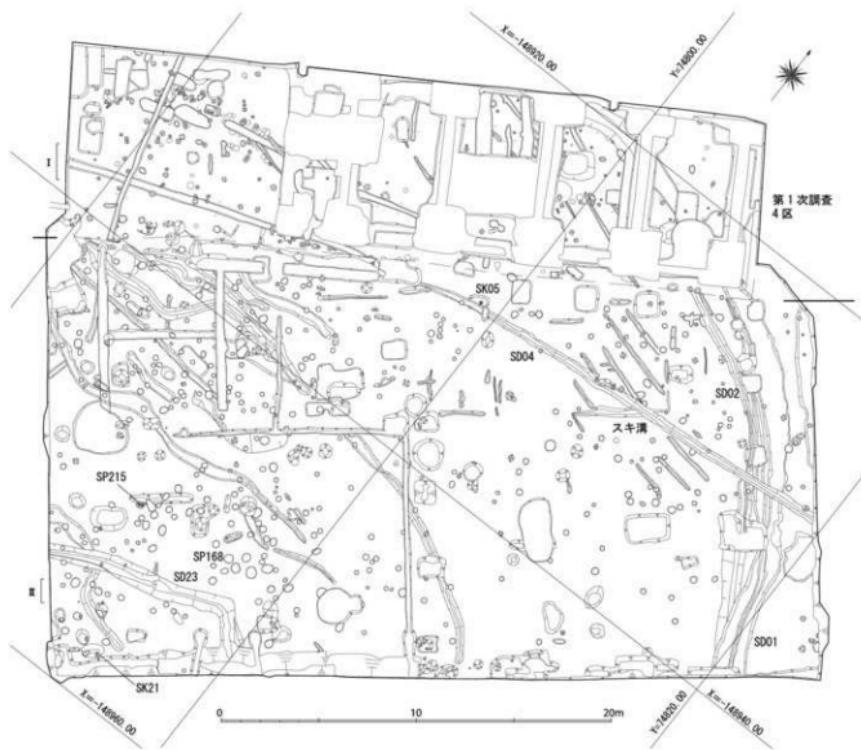


図21 調査区平面図

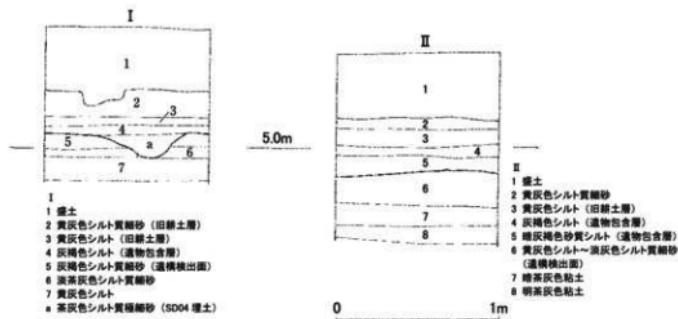


図22 基本土層図

ピット

400基近くのピットを検出し、直径0.2m前後を測るものも多いものの、半数以上のピットが0.1m程度で浅い凹み状を呈するものであった。大半は、弥生土器と考えられる小片が出土しているだけであったが、SP215からは、貼付突帯を施した壺片が出土した。また、調査区の西部では、深さ0.2~0.3mを測る柱穴が多く見られたが、建物として確まるものではなかった。

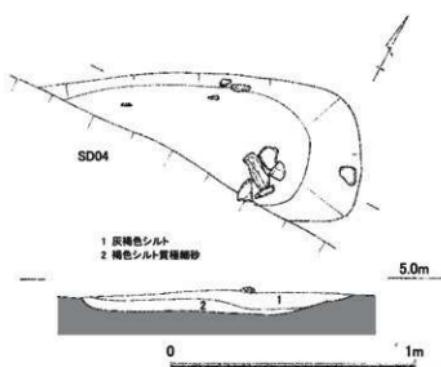


図23 SK05平・断面図



挿写真17 SP215遺物出土状況

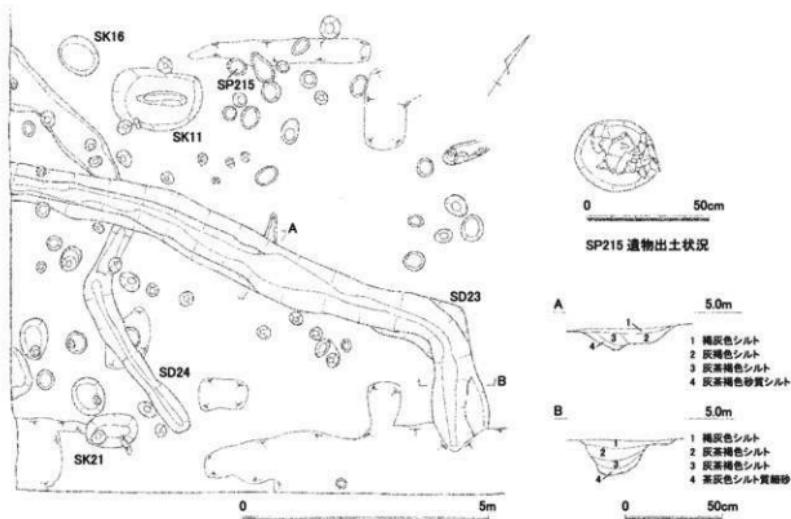


図24 調査区南西部遺構平面図

小 結

第3次調査では縄文時代晚期及び弥生時代前期の柱穴、溝、土坑と、平安時代以前の溝、平安時代の柱穴、時期不明の耕作溝を検出した。

縄文時代晚期及び弥生時代前半の遺構は、柱穴などの遺構を主に調査地の西部で集中して確認しており、第1次・2次調査地に近い部分に遺跡の中心があったと推測される。それとは対照的に、中央から東部にかけての範囲では、柱穴などは西部に比べ検出数が減じている。東部で検出したSD01・02などの南北方向の溝は、集落の境界を画するものであった可能性が高い。また、SK05で出土した片岩製の叩石をはじめ、大小の片岩が出土している。産地等は不明であるが、弥生時代の地域間の交流を示す資料として重要である。叩石は、その材質から、近在の大開遺跡や戎町遺跡で見つかっている石棒と同様のものであった可能性が推測される。

SD04は、出土した土器が細片のために時期が特定できないが、御歳遺跡や水笠遺跡では古墳時代～奈良時代の掘立柱建物が真北方向を意識して築かれていることがわかっている。SD04も真東西方向に近い方向で掘削されていることから、先の建物と同様の時期のものと推定される。

平安時代については、第1次調査で確認した掘立柱建物の一部と考えられる柱穴を検出したが、ほかの建物は復元できなかった。調査地南半に堆積する遺物包含層から平安時代後期以降の土器も出土することから、平安時代後半には、湿地状の地形もしくは、耕作域として利用がなされていたものと推定される。

また東部で検出した耕作痕と考えられる溝について、時期の明確な遺物が確認されていないため、正確な時期は現状で不明であるが、西に位置する大橋町遺跡で検出された鋤溝とほぼ直交する方向性があることから、古墳時代から飛鳥時代頃のものかと推定される。

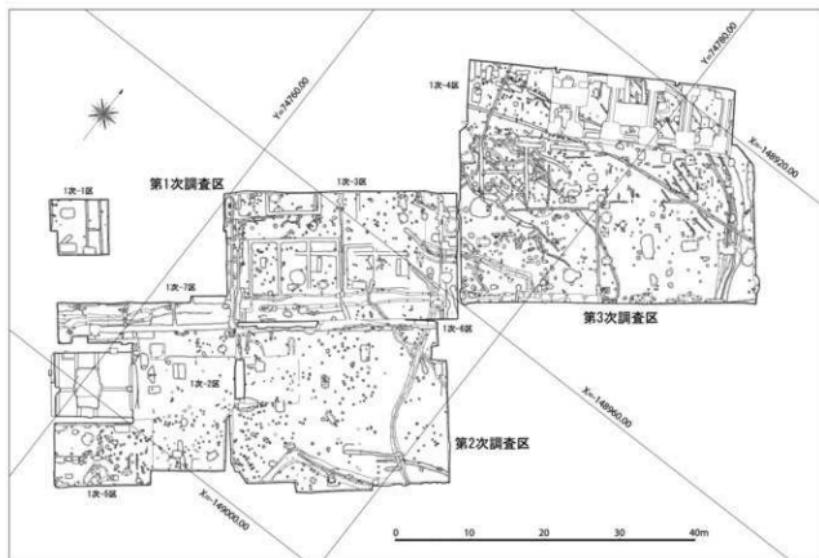


図25 第1～3次調査地 全体平面図

(4) 第4次調査の概要

事業地の南端に位置する調査地である。調査地の制約により、南北に2分割して調査を実施した。調査の結果、縄文時代晚期及び弥生時代前期の竪穴建物状遺構・土坑・埋甕・柱穴、中世の掘立柱建物・柱穴・土坑・溝・耕作痕など多くの遺構を確認した。

基本層序は現地表面下に盛土、旧耕作土が堆積し、北側ではその下に第1面の遺構面となる灰褐色シルト質細砂、さらに下層に第2面となる灰茶色質細砂が堆積する。一方、南側では、旧耕作土の下に弥生時代の遺物包含層及び第1面となる暗灰褐色シルト質細砂、灰褐色砂質シルト、さらにその下に第2面となる灰黑色細砂～粗砂、淡灰茶色シルト質細砂が堆積する。第2面は茶色系と乳黃灰色シルト～シルト質細砂が堆積する部分と、灰色、または暗灰色砂礫が堆積する部分とが縞状に見られる。縄文時代晚期以前の流路に起因する堆積の違いと考えられる。

また遺構面以下については、遺構面から下層に約2.8mまで掘削を行った結果、面からの深さ2.0mあたりまでは乳黃灰色粘土と暗灰色シルトが互層となり、その下は青灰色砂質シルトが堆積していた。

検出した遺構は中世の区画溝及び耕作痕、平安時代後期の掘立柱建物1棟、柱穴、弥生時代後期以降の溝、縄文時代晚期～弥生時代前期の掘立柱建物1棟、竪穴建物状遺構4基、土坑36基、ビット175基、弥生時代前期以前の河道を1条検出した。

溝

調査区全体で中世の耕作に伴うものと考えられる溝を検出した。

調査地の西側で検出したSD101・102は、検出長約47m、幅約0.5m、深さ0.2mを測る平行に掘削された溝である。両溝間の距離は約3.0mである。南側では再掘削が行われたような堆積状況が確認される。また北側ではSD101・102に近接してSD113・SD114が掘削され、同様の区画が踏襲されていたものと考えられる。またこれらの溝に直交する東西方向の溝で、底面に踏み跡状の痕跡が残るSD112は、一部で途切れるが検出長約35mを測る。幅は約0.5m、深さ0.1～0.2m。これらの溝からは平安時代後半～鎌倉時代と考えられる土器が出土している。一方、調査地の北部東半分では幅0.2m、深さ0.1m～0.05mの南北方向の浅い溝を10条ほど検出した。埋土は直上層の黄灰色シルトあるいはシルト質の細砂が堆積しており、中世以降の耕作溝と考えられる。中央付近でこれらの溝に削平されるように真北方向の検出長約7.0m、幅0.2～0.3m、深さ約0.1mの溝を1条検出している。埋土からは弥生時代後期と考えられる土器が出土した。

掘立柱建物

SB101は4間×3間の総柱の掘立柱建物である。柱穴の直径は約0.2m、深さ0.3～0.5m、柱間は一部で異なるがおよそ1.8mである。柱穴の埋土には乳黃灰色シルトがブロックで混じる。柱穴から出土の土器皿より、平安時代後期の建物と考えられる。

SB201は1間×1間の掘立柱建物である。柱穴は直径0.4m、深さ約0.2mを測り、柱穴間は柱穴中央間で約2.0mである。柱穴からは、縄文時代晚期以前の浅鉢と考えられる土器片が出土している。

竪穴建物状遺構

一辺、または径が3.0～5.0mの不整形な落ち込みを調査区の中央部で3箇所、北端で1箇所検出した。

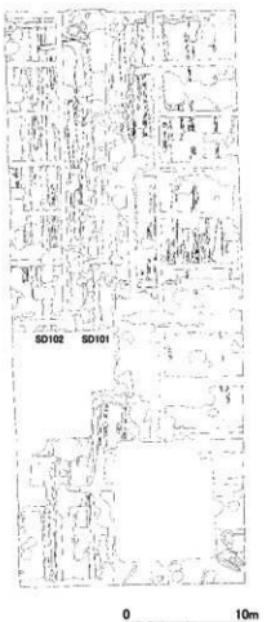


図26 第1遺構面平面図



図27 SB101平・断面図

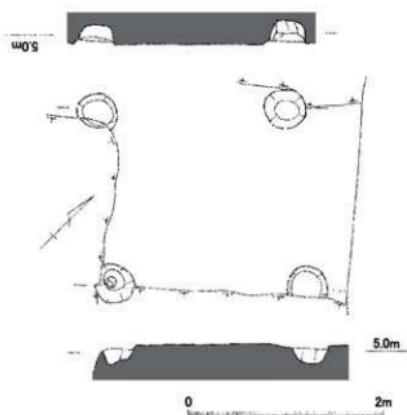


図28 SB201平・断面図



挿図写真18 SB201全景

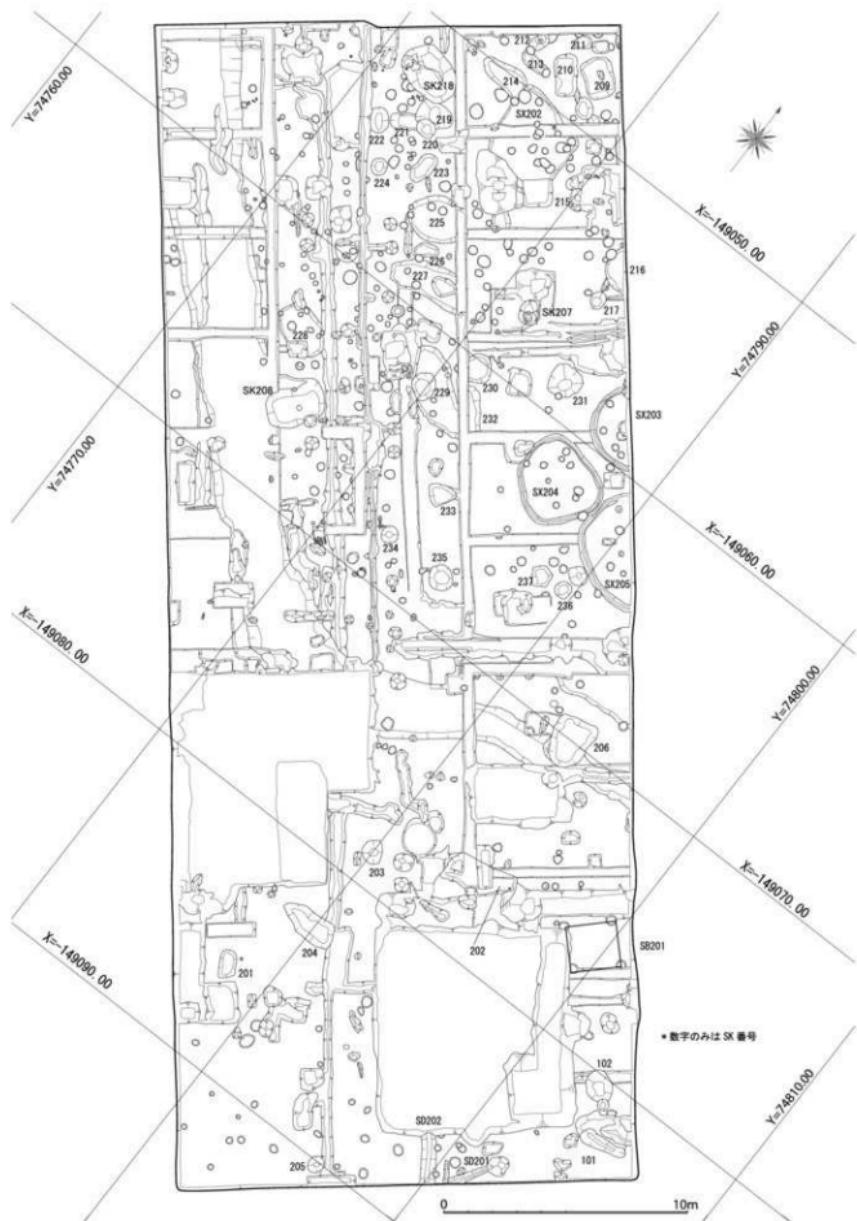


図29 第2遺構面平面図

SX202は調査区北端で検出した不整形な隅丸方形を呈する遺構である。1辺約3.0m、深さ0.1mを測る。遺構内にはピット状の非常に浅い凹みが見られるが、上層からの掘り込みの痕跡か、遺構に伴うものか判然としない。周壁溝や中央土坑などの付帯施設も見られなかった。埋土からは弥生土器と考えられる土器細片が出土した。

また調査区中央部で検出したSX203～205はきわめて近接しているため、時期差があるものと考えられる。

SX204は全体を検出しており、長径3.6m、短径3.0mの平面梢円形の遺構で、深さ約0.2mを測る。幅0.2mの周壁溝がまわる。床面ではピットを9基検出したが、柱痕跡はなく、深さも0.1～0.15mで浅い。埋土からは弥生土器と考えられる土器の細片が少量出土した。

SX203・05はともに東壁際で、全体の1／2程度を検出したものと考える。直径3.0～3.5m、深さ0.1mの遺構である。幅約0.2mの周壁溝がまわるが、SX205は北側で一部が途切れる。床面でピットを検出しているが、SX205検出のピットの内、わずかに1基のみが直径0.2m、深さ0.2mを測り、それ以外は明確な痕跡とならなかった。埋土からは弥生土器と考えられる土器が出土した。

土坑

主に調査地の北から中央にかけて検出した。SK206・208・218は調査地北端から中央で検出した土坑で、長さ約2.0m、幅0.8m、深さ0.4～0.6mを測る。埋土は暗灰色砂質シルト～濁オリーブ灰色シルト質極細砂である。SK208からは弥生時代前期の重弧文を施した土器片、SK218からハケ調整を施した甕の底部や小型の壺、下層からは突帯文土器が出土した。土坑の断面形状はいずれもやや崩れた箱形を呈している。

埋甕（鉢）

SK207は調査区北半で検出した埋甕（鉢）遺構で、土坑の掘形は直径0.7m、深さ0.2mを測る。土坑の底に口縁部を南に向けるように突帯文土器の鉢を横に据え置き、その上に甕か鉢、いずれかの底部を含む体部下半の部位が被さった状態で出土した。口縁の破片がわずかに出土したが、量は少なく、重ねられた土器は下半部のみを用いたものと推測される。鉢は底部が失われるが、検出時の状況、また整理作業の過程でも土坑埋土からまとまった底部片の出土は確認できておらず、底部の打ち欠きについては不明瞭である。甕内部には淡赤茶色シルト質細砂が堆積しており、土壤洗浄、内容物の選別作業を行ったが、骨片、あるいは種子などの混入は認められなかった。

ピット

調査地全体で、175基のピットを検出した。特にSB101の周辺で検出したものは、SB101の柱穴と同規模のものが多く、先述したように建て替え、もしくは別の建物を構成したものと考えられる。また、北東部でもまとまってピットを検出しており、同じく建物が存在した可能性はあるが、現状では不明である。

河道

SR201は、調査地北西隅から南流し、調査地中央付近で、東に流れを変える河道である。検出長約42.0m、幅1.0～3.0m、深さ0.6mを測る。埋土は下層から中層には茶褐色砂礫が堆積し、上層は暗褐色粗砂である。細片の土器が出土したのみで、詳細は不明であるが、東端付近でSK206に一部削平を受けているため、弥生時代前期以前のものかと考えられる。

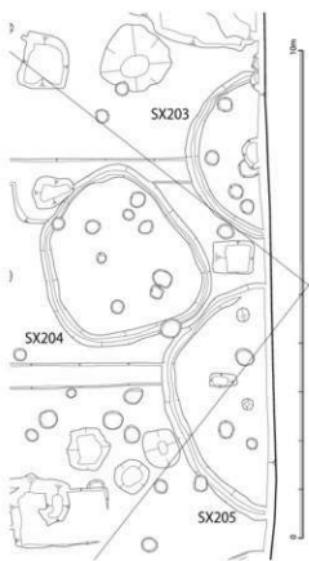


図30 SX203～205平面図

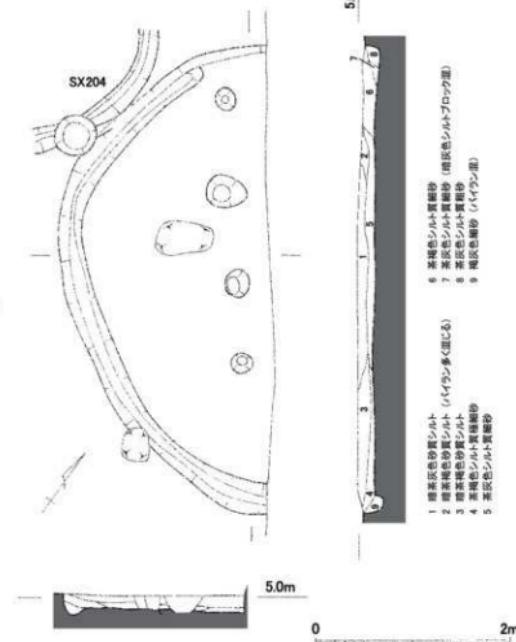


図31 SX205平・断面図

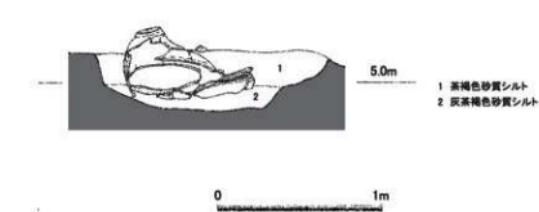
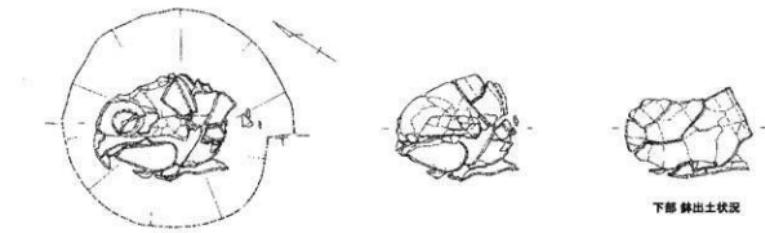


図32 SK207平・断面図

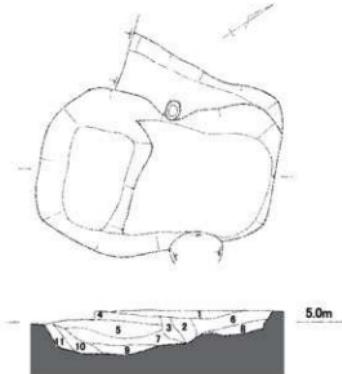


図33 SK208平・断面図
 1 基灰色砂質シルト 7 灰茶色シルト質細砂
 2 淡灰茶色シルト質細砂 8 基灰茶色シルト質細砂
 3 淡灰茶色シルト質細砂 9 灰茶色シルト
 4 灰色シルト質細砂 10 灰茶色シルト
 5 灰茶色シルト質細砂 11 灰茶色シルト質細砂
 6 灰茶色シルト質細砂

図33 SK208平・断面図

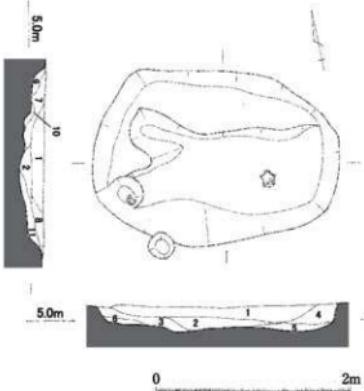


図34 SK218平・断面図
 1 灰茶褐色シルト(ややバイラン入る) 7 淡灰茶色シルト質細砂(バイラン多い)
 2 淡灰茶色シルト質細砂 8 基茶褐色シルト
 3 南高茶色砂質シルト 9 南高茶色シルト質細砂(バイラン多い)
 4 基茶褐色シルト質細砂(バイラン多い) 10 基灰茶色
 5 灰茶色シルト 11 南高茶色シルト質細砂
 6 灰茶色シルト質細砂

図34 SK218平・断面図

小 結

第4次調査地では、縄文時代晩期および弥生時代前期の竪穴住居状遺構・土坑・埋壺（鉢）・柱穴、中世の掘立柱建物・柱穴・土坑・溝・耕作痕など多くの遺構を検出した。

縄文時代晩期および弥生時代前期については、掘立柱建物、竪穴住居状遺構、土坑をはじめとする多くの遺構を確認した。

竪穴建物状遺構は、直径が3.0~4.0m程度と規模が小さく、周壁溝が備わっているが、明瞭な柱穴や中央土坑など竪穴建物に付帯する施設が欠如しているため現在のところ断定はできない。1間×1間のSB201についても、その規模から竪穴建物の可能性を考慮する必要があろうかと考える。

土坑は、深さが0.1m程度の浅い落ち込み状のものと、深さ0.3~0.4mの比較的深いものが確認されている。後者についてはSK206・208・218がそれに当たる。これらについては、埋土から種子、骨などが確認されておらず、食料貯蔵穴・墓の可能性は低い。また、これらの土坑は、形状・規模が近似している上、ほぼ等間隔に配置されているように見える。環状に土坑が配置されていた可能性も考えられる。

埋壺（鉢）は、土器の形態から長原式に並行する時期のものと考えられる。今のところ墓のようなものと推測するが、類例を調査し、その性格を検討する必要がある。

平安時代については区画溝と考えられる南北溝や鋤溝、4間×3間の縦柱建物（SB101）を検出した。南北溝は、調査地内を現在の地割りに沿うことが確認されており、同規模の直交するSD112が区画溝と捉えられるならば、今の町割に近いものであったと考えられる。切り合い関係から、SD101・102などの南北溝や東西溝SD112の方が建物より新しいものであり、鎌倉時代以降に掘削されたと推定される。また、平安時代頃と考えられる柱穴は調査区の北側で主に検出しており、建物が建てられた範囲は、南には拡がらないものと考えられる。

(5) 第5次調査の概要

調査地は第1次調査の2・5区の南に隣接する。調査区内には震災後の整地層、近代～戦前の建物基礎、整地層の下に近世～近代の旧耕作土が堆積し、その下に調査区北西部では茶褐色砂及び淡黄褐色粘質土の遺構面がみられる一方、調査区東部および東南部には層厚0.05～0.25m前後の繩文土器、弥生土器、須恵器を含む黒灰色粘性砂質土が堆積し、この遺物包含層は北西部から南東部により厚く堆積している。したがって茶褐色砂及び淡黄褐色粘質土の遺構面は緩やかに北西から南東に傾斜する。調査区北西部の茶褐色砂と南東部の黒灰色粘性砂質土層上面で柱穴と考えられる小型のピット群や溝を検出した。この小型のピット群を検出した遺構面は標高T.P.5.0mでほぼ平坦面を形成する。この第1遺構面において掘立柱建物9棟、溝4条を検出した。

さらに黒灰色粘性砂質土の遺物包含層を除去した茶褐色砂及び淡黄褐色粘質土層により構成される第2遺構面において精査した結果、39ヶ所の柱穴状ピットを検出したが、ピット内から明確な遺物はなく、掘立柱建物としての纏まりも欠いている。

第1遺構面

掘立柱建物 SB01

調査区南辺中央で検出した南北4.0m以上（2間以上）、東西5.0m以上（2間以上）の掘立柱建物である。南北の柱間は北より1.6m+2.4m、東西の柱間は2.5m等間を計測する。柱掘形は直径0.35～0.5mの円形で、深さ0.3～0.4m前後を残す。建物の北西寄りに束柱があり、総柱の建物と考えられる。建物の棟方向は不明であるが、ほぼ真南北方向の柱並びを検出した。

掘立柱建物 SB02

調査区南辺中央東側で検出した南北4.7m以上（2間以上）、東西6.0m以上（3間以上）の掘立柱建物である。南北の柱間は2.3m等間、東西の柱間は西より1.8m+1.8m+2.4mである。北西の隅柱は現代の攪乱によって滅失するものの、両側に沿うように柱を建て据え替えているものと推定される。柱掘形は直径0.4m前後の円形で、深さ0.3～0.4m前後を残す。建物の南西寄りに束柱があり、総柱の建物と考えられる。建物の棟方向は不明であるが、ほぼ真南北方向の柱並びを検出した。

掘立柱建物 SB03

調査区中央東側で検出した南北6.9m（6間）、東西5.7m（3間）の南北棟の掘立柱建物である。南北の柱間は北から2.4m+1.8m+1.8m+1.2m+1.2m、東西の柱間は西より2.1m+1.8m+1.8mを計測する。柱掘形は高位にあたる北西側の掘形が直径0.5m前後、深さ0.5m前後の円形、低位の南東側の掘形は直径0.25m前後、深さ0.25m前後を計測することから北西から南東に削平を被っていると考えられる。建物の棟方向は、北39°西を探り、ほぼ現状の街路と同一方向を探っている。

掘立柱建物 SB05

調査区東辺中央部で検出した南北3.9m以上（2間以上）、東西2.1m以上（1間以上）の掘立柱建物である。南北の柱間は北から2.1m+1.7m、東西の柱間は2.1mを計測する。柱掘形は直径0.3～0.4m、深さ0.25～0.4mを残存させている。建物の南西寄りに束柱があり、総柱の建物と考えられる。建物の棟方向は不明であるが、ほぼ真南北方向の柱並びを検出した。

掘立柱建物 SB06

調査区北部西よりに検出した南北4.5m以上（2間以上）、東西6.0m（3間）の東西棟と推定される掘立

柱建物もしくは南側部分1間分が柵列、別棟建物であることも考えられ、当該建物が南北1間以上、東西3間の掘立柱建物の可能性もある。南北2間以上、東西3間以上の場合、南北の柱間は北から2.4m+2.1m、東西の柱間は西から2.4m+1.8m+1.8mを計測する。柱掘形は建物の北部で一辺0.6m前後、深さ0.4~0.5mを残す方形掘形であるが、南側近代の擾乱を受けた掘形は直径0.3~0.4m前後、深さ0.3m前後の円形掘形を残存させている。東柱は南北には揃わないが東西に並ぶ柱が2ヶ所確認でき、総柱の掘立柱建物と考えられる。建物の方向は梁方向で、北39°西を探り、ほぼ現状の街路と同一方向を探っている。

掘立柱建物 SB07

調査区中央部西よりに検出した南北4.2m(3間)、東西4.5m(3間)の東西棟と推定される掘立柱建物である。南北の柱間は北から1.5m+1.2m+1.5m、東西の柱間は西から1.5m+1.8m+1.5mを計測する。柱掘形は直径0.4~0.5m、深さ0.3m前後の円形掘形である。東柱は直径0.25m前後、深さ0.2m前後の小型の柱掘形を設け総柱建物としている。建物の棟方向が南北棟とすれば、建物方向はほぼ真南北方向と考えられる。

掘立柱建物 SB08

調査区中央部西よりSB07に重複して検出した南北5.1m(3間)、東西4.7m以上(3間以上)の南北棟と推定される掘立柱建物である。南北の柱間は北から1.5m+1.8m+1.8m、東西の柱間は1.5m等間を計測する。柱掘形は一辺0.5~0.9m、深さ0.3m前後の方形掘形である。東柱と想定される柱は一辺0.25~0.5m前後、深さ0.2m前後の不定型の柱掘形を設けたとみられるが、通りは不揃いであり総柱建物かどうかは検討をする。建物の棟方向が南北棟とすれば北39°西を探り、ほぼ現状の街路と同一方向を探っている。

掘立柱建物 SB09

調査区西北隅で検出した南北6.0m以上(3間以上)、東西4.5m(3間)の東西棟と推定される掘立柱建物もしくは柵列の隅部である。建物もしくは柵の北西側は調査区外になる。南北の柱間は北から2.7m+1.8m+1.5m、東西の柱間は1.5m等間を計測する。柱掘形は一辺0.3~0.7m、深さ0.2m前後の方形掘形である。柱列方向はほぼ真南北方向と考えられる。

溝 SD01

調査区のほぼ中央を南北に敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘り込まれた状態で検出された。幅0.6~0.75m、深さ0.12~0.15mの断面形皿状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる土が堆積している。溝は調査区の南側では不明確であり、明確に検出できず、削平された可能性もある。

溝 SD02

SD01の東側約2.0m(心間距離)に平行して、調査区のほぼ中央を南北に敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘り込まれた状態で検出された。幅0.8~1.1m、深さ0.25m前後の断面形皿状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、中層に褐灰茶色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる土が堆積している。溝は擾乱を被りながらも深さ0.05m前後で、調査区の南側に浅く続く。

溝 SD03

SD02の東側約2.5mにやや方向を東に振り、調査区のほぼ中央東寄りを南北に敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘り込まれた状態で検出された。幅0.5m、深さ0.1m前後の断面形椀状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる土が堆積している。溝は擾乱を被りながらも深さ0.05m前後で、調査区の南側に浅く続く。

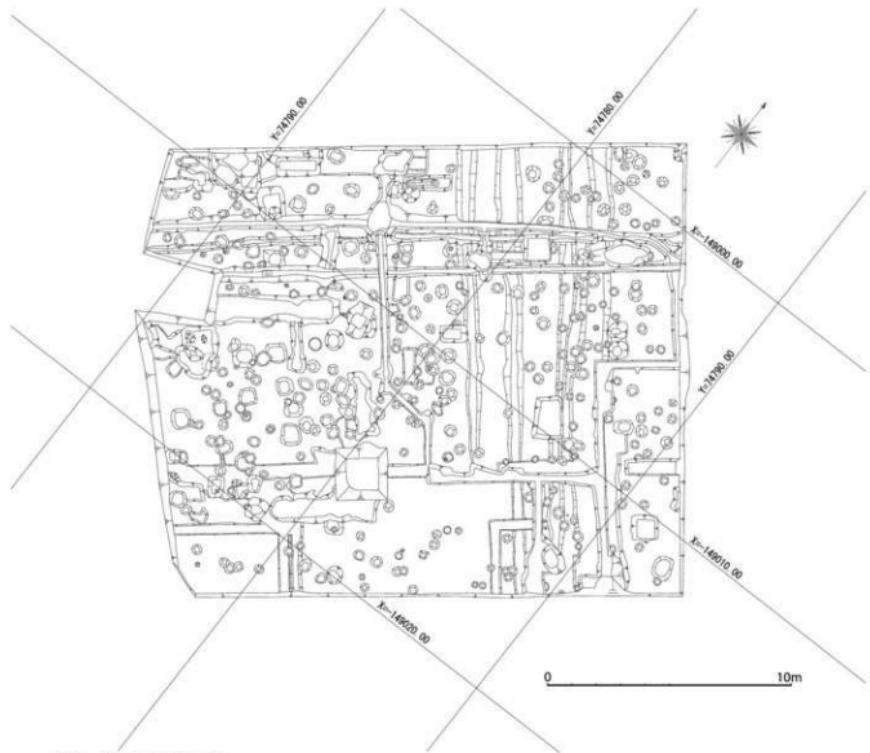


図35 第1遺構面平面図

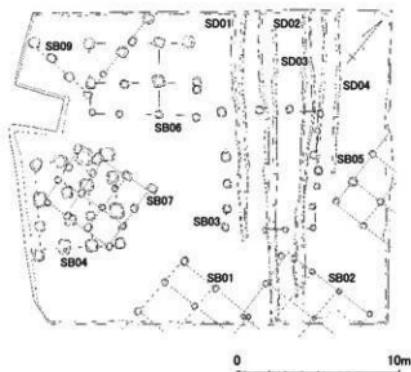


図36 第1遺構面主要検出遺構配置図

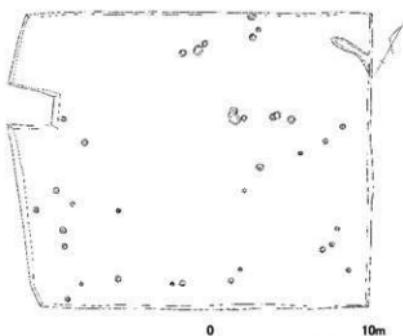


図37 第2遺構面平面図

溝 SD04

SD02 の東側約4.0m（心間距離）に、SD01・SD02に平行して、調査区の東側を南北に敷設された溝である。旧耕作土直下、黒灰色粘性砂質土上面から掘り込まれた状態で検出した。幅0.9～1.1m、深さ0.25m前後の断面形皿状の素掘りの溝である。溝の埋土は下層に精良な暗灰色粘性砂質土、上層は暗灰色砂に黄色土ブロックが混じる土が堆積している。溝は調査区の半ばから南側では不分明であり、明確に検出できず、削平された可能性もある。

第2遺構面

第1遺構面を形成する黒灰色粘性砂質土を除去すると、調査区の北西から南東方向に傾斜する淡黄色粘性砂質土の基盤面を検出し、この面において37箇所の円形のピットを検出した。ピットは直径0.3m前後で、深さ0.2～0.3mを測る。特に調査区南半、東西両端で検出したピットの中には柱痕跡を残すものが含まれている。遺物の出土は小片の土器が出土するのみで、明確な時期は判然としない。



挿図写真19 第2遺構面全景

小 結

第1次調査5区の南に隣接する。第1次調査では柱穴群が検出されたが、後世の攪乱・削平のため建物としての雰囲りを欠く状況であった。当調査区では、真南北を採用する建物群と現在の街路方向に近い方向を採用する建物群を検出した。この両建物群の時期差は、真南北を採用するSB07が街路方向に近い方向を採用するSB08の柱掘形を切ることから、街路方向に近い方向を採用する建物群が先行して建てられた可能性が高い。しかしながら、出土遺物からみれば建物を検出した遺構面上に堆積する黒灰色粘性砂質土の遺物包含層には須恵器腹片等がみられるものの、柱穴の埋土内からは縄文時代晩期～弥生時代前期の土器片が出土しているのみで、これら建物群としたまとまりの是非とともに、遺構の時期・性格についてはさらに検討が必要になるであろう。

第2遺構面については、当調査区の西側に位置する第4次調査地で、黒灰色粘性砂質土の下面で縄文時代晩期～弥生時代前期の竪穴建物状遺構及び土坑、埋甕が検出されていることから丹念な精査を試みたが、ピットを検出するのみで、住居址状の遺構の抜がりは確認されなかった。

柱穴の並びにより9棟の建物を復元したものの、出土遺物が乏しく、また遺構の残りもあまり良くなく、詳細については明らかでない。

(6) 第6次調査の概要

2面の遺構面を確認し、第1遺構面で中世の遺構を、第2遺構面では中世以前から縄文晩期、さらにそれ以前の遺構を確認した。

調査地内の基本層序は、現況の表土及び盛土の下に数枚の耕作土（2a層・3a層）があり、この下面、4a層上面が第1遺構面となる。この面では中世と思われる耕作痕（鋤溝）を調査区全域で検出した。その方向性は現在の町割に合致する北西-南東方向である。

中世から縄文時代晚期の遺物を包含する4a層下面が第2遺構面で、4a層は陸化した後の表土層で、生活面であるが、海岸の干涸として形成されていたものと考えられている。4層以下は海成の堆積土である。



挿図写真20 第1遺構面全景



挿図写真21 SK02検出状況

第2遺構面

掘立柱建物、土坑、溝、柱穴等の遺構を検出した。

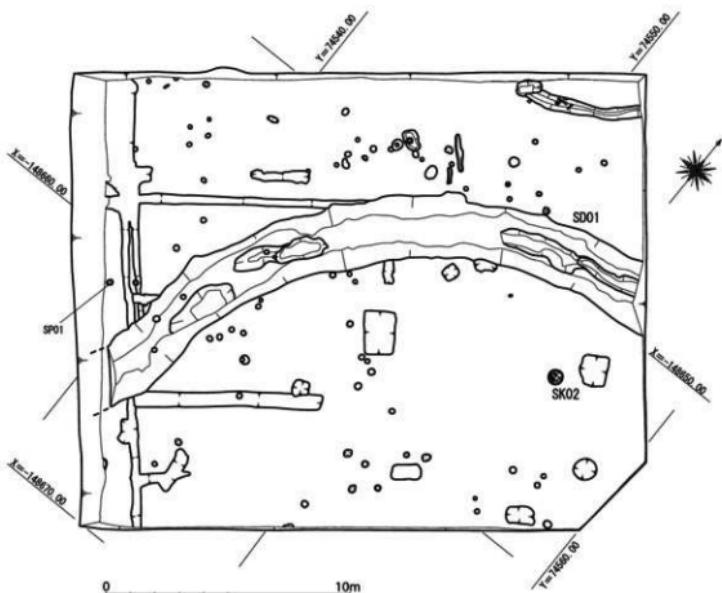


図38 第2遺構面平面図

SP01

第5次調査で確認した掘立柱建物からの続きとなる柱穴を1基検出した。これにより5次調査で復元したSB05は東西1間×南北2間の規模となる。当調査区でも時期の明らかになる遺物の出土はなかった。

SK02

縄文時代晚期の突堤土器が出土した土坑である。平面円形で、直径約0.5m、遺構検出面からの深さは約0.1mである。埋土は黒褐色粘土の単一層である。

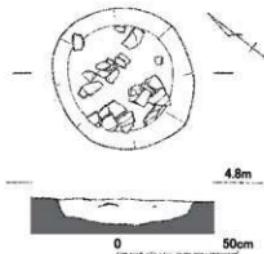


図39 SK02平・断面図

SD01

弓なりに弧を描く溝状の遺構である。幅2.2~2.5m、遺構検出面からの深さ1.0~1.1m。当地が干涸であったときに形成された溝（みお）と考えられる。西から東へ流れ込む土石流で埋没する。土器の小片が数点出土したが混入品の可能性が高い。

小 結

4a層は、当地が干涸であった時期に形成された土層であるが、後に陸地化が進み、遅くとも縄文時代晚期には人が居住できる状態になっていることが第4次調査で検出された竪穴住居や、今回検出した土坑などの存在により確認できた。



挿写真22 調査作業風景

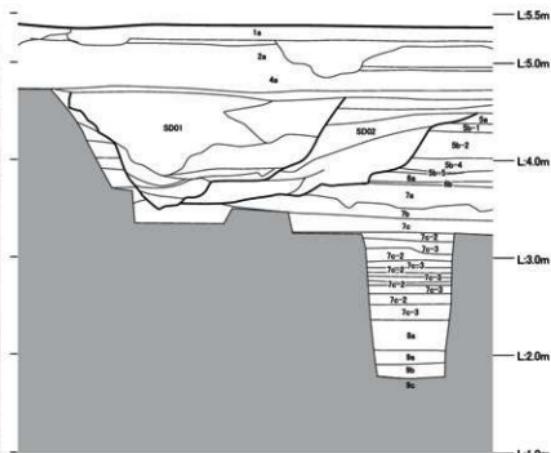


図40 土層断面図

III. まとめ

今回の震災復興再開発事業に伴う若松町東遺跡における一連の調査では、下記の内容について確認できたと考える。

- ①建物、柱穴、土坑など居住域に伴う主な遺構は、北側の第1次調査地4区から3区、6区、第2次調査区、第5次調査区、第4次調査区にかけて南北に帯状に分布するよう、検出状況からは若松3・4丁目の街区を南北に貫く微高地の存在が予想される。第2次、第3次調査区の東半ではこの微高地の縁辺部で、地形に沿って蛇行して掘削される溝を検出している。
- ②縄文時代晚期～弥生時代前期にかけての土坑、溝、竪穴建物状遺構、掘立柱建物を検出し、当該期に当地において定住化が図られたものと推測される。
- ③平安時代の小規模な集落が存在した可能性がある。

少ないながら、図化し得た遺構出土の遺物と合わせて各調査区での様相、判明した状況を記してまとめとした。

まず全般に遺物がまとまって出土した遺構が少なく、土坑、溝からは小片ながら遺物は出土したが、柱穴、ピットからはごくわずかしか出土しなかった。また土器は一様に磨滅が顕著で、遺構の時期を考える上では難しい状況であった。番号を付した遺構でも、わずかな窪みが土壤化したもの、またピットの中にも杭の周囲が、同じく土壤化した痕跡を遺構とした可能性が高いことは否めない。また第1次調査地の北側に位置する調査区では旧耕土層も存在せず、後世の耕作などの影響により遺構面が削平されたものと考えられる。

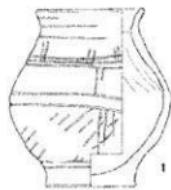
遺物包含層のうち上層とした層は中世に形成された旧耕土層である。縄文時代晚期～中世の遺物が混在し、量的には突帯文土器が多く、その他は平安時代～中世の須恵器や土師器、黒色土器である。下層包含層は東側への下がり地形が認められる調査区で確認でき、縄文時代晚期～弥生時代前期の土器片【写真図版21-3】やサヌカイト片、片岩などが出土した。溝は微高地端部、下がり地形への変換点付近より掘削を開始するようで、落ち際から出土したものと推測される。ただ全般的には事業地内では遺構・遺物ともに必ずしも残りが良い状況とはいえない。

そのような状況にあって、第1次調査では3区を中心に縄文時代晚期の突帯文土器深鉢6が出土した土坑SX301、壺1が出土したSK301、弥生時代前期の遺構と考えられるSK307などを検出した。1は第1次3区SK301出土の器高11.0cm、口径7.0cmの小型の壺である。口頸部界、体部の4箇所に2～3条の沈線と2～3条単位の縱方向の沈線、体部下半に斜め方向の細い沈線を施す。口縁はわずかに外反する。色調は茶褐色で、胎土に長石、石英、クサリ礫を含む。2・3は第1次調査3区SK307出土の壺で、口縁は如意状に外反し、端面に細かい刻み目、口頸部界に段をもつ。

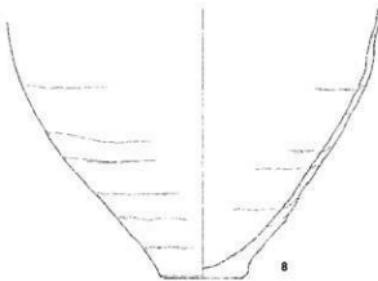
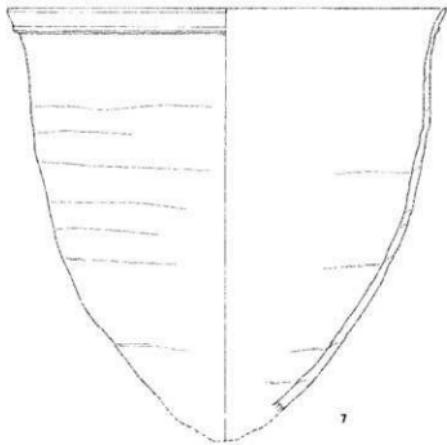
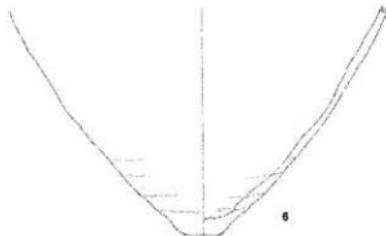
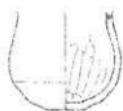
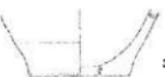
第2次調査区では1間×1間の小規模な掘立柱建物を検出し、その東側で蛇行する溝を検出した。建物は小規模なもので、同規模の建物が第4次調査区でも確認された。縁辺部の蛇行する溝から突帯文土器や尖頭器、片岩が出土した。

第3次調査区でも微高地縁辺部に掘削された蛇行する溝を検出し、小片ながらも比較的多くの突帯文土器の出土を見た。突帯文期と推測される壺片19・20が出土した柱穴(SP215)、石棒の転用かと考えられる片岩製の叩石21が出土した土坑(SK05)など、縄文時代晚期に属する遺構・遺物の検出が目立つほか、黒色土器片の出土した平安時代の溝など、第1次調査4区と同様、平安時代の遺構の拡がりが確認できた。

19・20は肩部に貼付突帯を付した壺の破片と考えられる。リボン状の摘まみのような装飾を施す。色調は



0 10cm



0 20cm

図41 出土遺物実測図 (1)



図42 出土遺物実測図（2）

赤褐色で、胎土に石英、長石、角閃石を含むもので河内産と考えられる。石器はサヌカイト製の石鎌、石錐、楔形石器【写真図版23-1】、磨石や石皿片【写真図版23-2】が当調査区をはじめ、各調査区の遺物包含層より出土している。また全般に結晶片岩の出土が目立つ【写真図版23-3】。完全な石棒形態のものはなく、遺存状況からは故意による破片なのかは判然とはしない。小口に敲打痕をもち、叩石などへの転用が考えられる21が第3次調査区SK05から、同様のものが第4・6次調査区の包含層から出土している。産地等は不明であるが、縄文時代晩期～弥生時代前期の地域間交流を示す資料として重要である。その他、第2次調査区SD801・807や第3次調査区SD04に礫の集中する箇所があり、第3次調査区SK21からは残存長10.2cm、最大厚さ3.4cm、重さ338.3gの磨製石斧22が出土した。

事業地南に位置する第4次調査区では竪穴建物状遺構、掘立柱建物、土坑を多数検出、突帯文土器の深鉢7・8を埋納した土坑を検出し、調査区全体に縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構が広がる状況が確認できた。7は復元高35cm、口径36.4cm、砲弾形の深鉢である。この深鉢を横位に置き、もうひとつの鉢、または甕8を被せたものである。8は底径7.0cm、残存高22.0cm、平底を呈する。いずれも色調は茶褐色、胎土に石英、長石、クサリ礫を含む。8の口縁となるかは判然としないが、この土坑からは13・14の口縁片も出土する。ハケ調整を施す甕底部4と小型の壺5が出土したSK218の下層からは小D字形の刻み目をもつ深鉢口縁片15・16が出土した。3条の重弧文、3条の削り出し突帯をもつ壺体部片13・14が出土したSK208からは、如意形に外反する口縁で口頸部界に段をもつ9や10の壺口縁片が出土しており、弥生時代前期の遺構と考えられる。

第6次調査区でも土坑を1基検出し、深鉢20が出土した。同一個体と考えられる破片が出土したが、非常に残りが悪い。口縁部、また胴部と考えられる破片にも突帯を施す可能性があるが、表面の劣化が激しく、また異様に器壁が薄いことから判然としない。

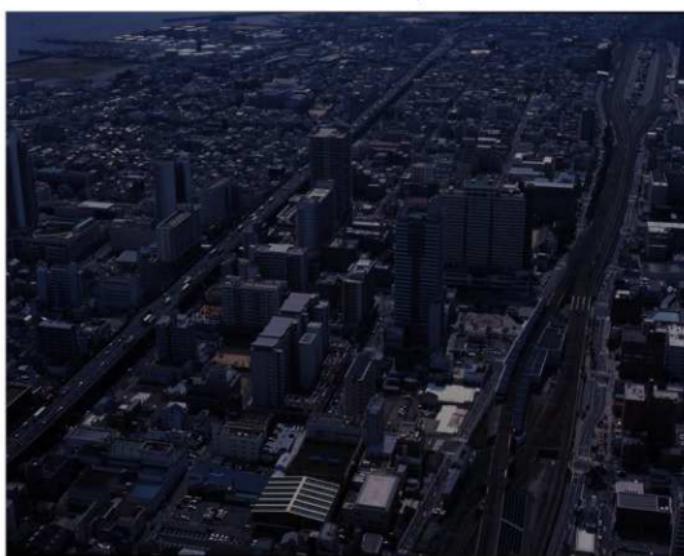
各調査区から出土した突帯文土器は口縁形状、突帯の貼付位置などからいずれも長原式に並行する時期と考えられる。縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての遺構が少ないながらも広範囲で確認され、4次調査SK218など一部の遺構で弥生土器と突帯文土器がともに出土している。

また平安時代の遺構については、第4次調査区で、遺存状態が悪く、図化し得なかったが、柱穴からての字状口縁の土師器皿が出土した総柱の掘立柱建物1棟を検出したほか、第1次調査4区では小片の黒色土器が出土した建物SB401・403や土坑SK401、SD401など近隣の遺構から須恵器、土師器、黒色土器片【写真図版21-2】が出土したほか、第5次調査区では時期は不詳ながら、多数の柱穴から建物を図上復元している。平安時代の小規模な集落が存在した可能性を示す。

今回の調査成果は、当地において縄文時代晩期～弥生時代前期、平安時代の、それぞれやや規模は小さいながらも集落が形成されたことを示す痕跡が確認されたことであり、遺跡の立地する妙法寺川流域、刈藻川流域、両河川間の集落形成を考える上で重要な成果であったと考える。縄文時代晩期の突帯文土器の出土は、縄文時代後期に集落形成を開始し、弥生時代前期古段階の環濠が確認された大開遺跡との関連性において、また弥生時代前期新段階に当地方の拠点集落となる戎町遺跡との関連において非常に重要なものと考える。今事業地の南隣接地区で継続中の大橋町東遺跡での発掘調査成果を含め、周辺での調査の進展が待たれる。



1. 調査地遠景（海上より）－矢印の交点が調査地周辺



2. 調査地遠景（東上空から）－矢印の交点が調査地周辺

写真図版 2



1. 第1次調査 SK301出土 壺



2. 第4次調査 SK207出土 深鉢



1. 第1次調査1区全景（北から）



2. 第1次調査2区西半全景（北から）



3. 第1次調査2区東半全景（西から）

写真図版 4



2. SX301検出状況（北東から）



3. SX301土層断面（北東から）



4. SK307検出状況（南から）



5. SK307土層断面（西から）



1. SK301全景（北東から）



2. SD302全景（北西から）



3. 第1次調査4区全景（北西から）



4. 第1次調査4区全景（南東から）



5. 第1次調査5区全景（北東から）



6. SK501全景（西から）

写真図版 6



1. 第1次調査 6区南北トレンチ全景（北から）



2. 第1次調査 6区全景（北東から）



3. 第1次調査 7区全景（北東から）



4. 第1次調査 7区東西トレンチ全景（東から）



1. 第2次調査 8-1区全景（南東から）



3. SD802-1・2



4. SD802-1・2 土層断面（北西から）



2. 8-1区南北トレンチ全景（南東から）



5. SD801 遺物出土状況（西から）

写真図版 8



1. 第2次調査8-2区全景（東から）



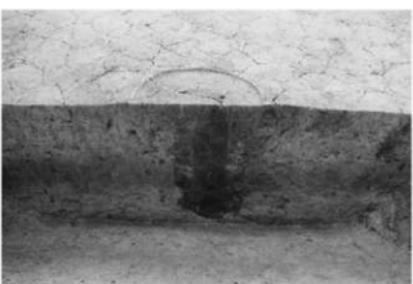
2. SB801全景（東から）



3. SB801 SP801土層断面（東から）



4. SB801 SP802土層断面（南から）



5. SB801 SP804土層断面（南西から）



1. 第2次調査 8-1区全景（北から）



2. 第2次調査 8-2区全景（南東から）



3. 第2次調査 8-3区全景（南から）

写真図版10



1. 第3次調査区全景（空撮写真・東から）



2. 第3次調査区全景（北西から）



1. 第3次調査区東半全景（南東から）



2. 第3次調査区南東部全景（南から）



3. 第3次調査区北西部全景（北西から）

写真図版12



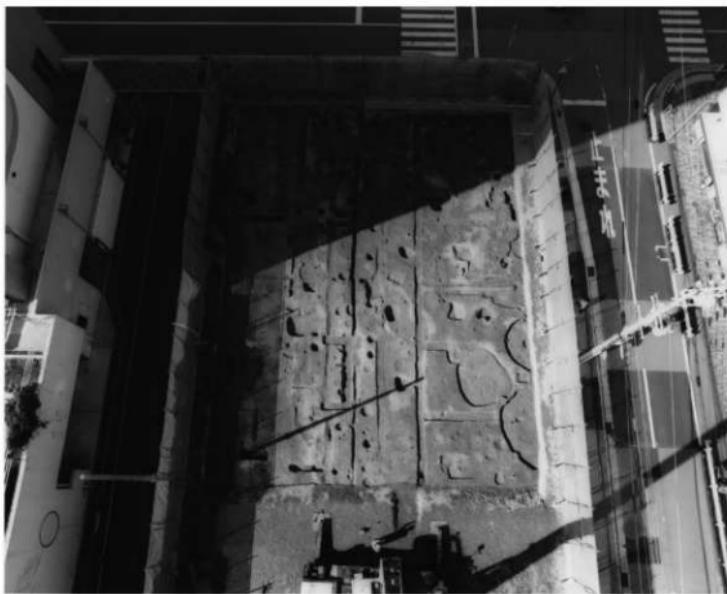
1. SK05遺物出土状況（北東から）



2. SP215遺物出土状況（北西から）



3. SK21石斧出土状況



1. 第4次調査区北半第2遺構面全景（空撮・南東から）



2. 第4次調査区北半第1遺構面全景（南東から）



3. 第4次調査区北半第2遺構面全景（南東から）

写真図版14



1. 第4次調査区北半第2遺構面南東部全景（南東から）



2. SX203・204・205全景（北西から）



3. SX203全景（北西から）



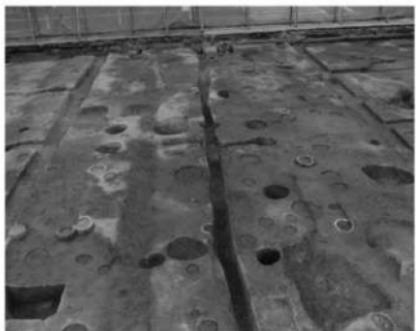
4. SX205全景（西から）



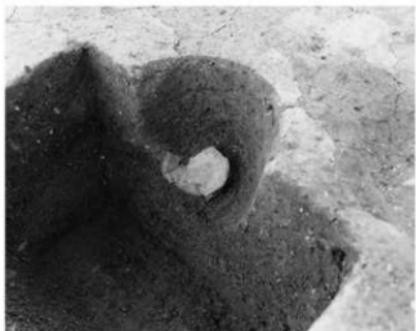
5. SX208全景（南東から）



6. SK218全景（南東から）



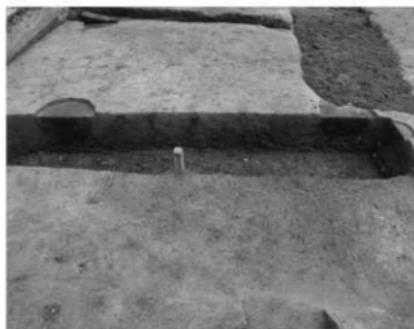
1. SB101北半全景（南東から）



2. SB101 P19 遺物出土状況（東から）



3. 第4次調査区南半第1遺構面全景（北から）



5. SB201ピット土層断面（北西から）



4. 第4次調査区南半第2遺構面全景（北西から）

写真図版16



1. SK207検出状況及び土層断面（西から）



2. 同 土層断面近景（西から）



3. 同 最終段階遺物検出状況（北から）



4. 同 上部壺(鉢)の被覆状況近景（北から）



5. 同 上部壺(鉢)除去後（北から）



6. 同 最下層鉢出土状況（北から）



1. 第5次調査区第1遺構面全景（東から）



2. 第5次調査区南西部全景（南東から）



3. 第5次調査区北西部全景（東から）

写真図版18



1. 第6次調査区第2遺構面全景
(南西から)

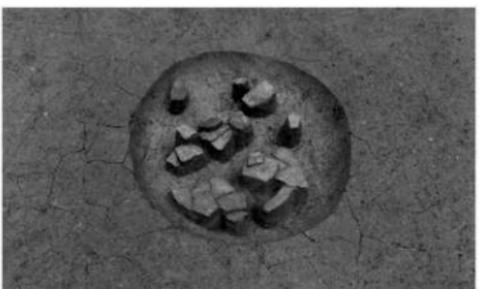


2. SD01近景 (南から)

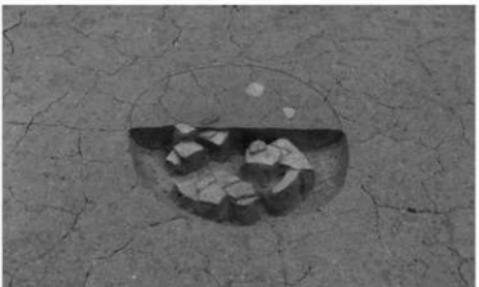


3. SD01中央部堆積状況土層断面 (東から)

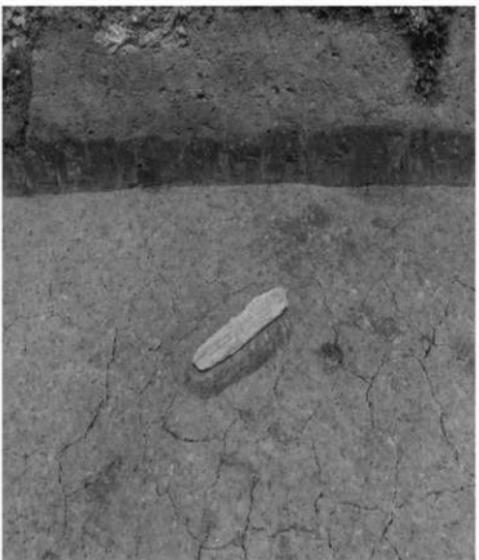
1. SK02検出状況（南から）



2. 同 土層断面（南から）



3. 第6次調査区基本土層



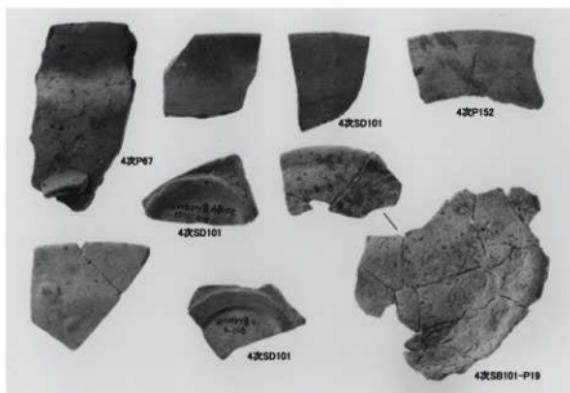
写真図版20



遺構出土の遺物



上層包含層出土遺物（1次調査）

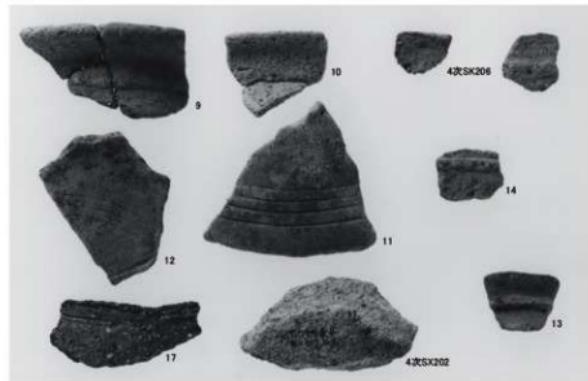
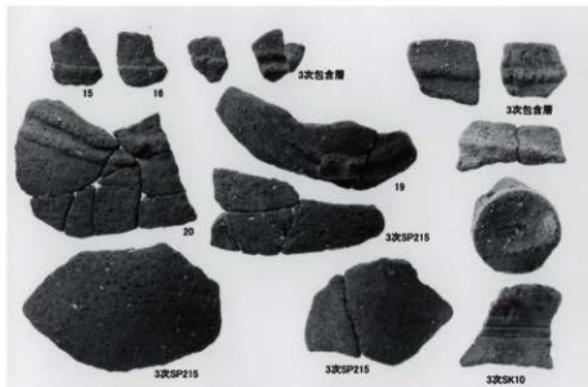


平安時代遺構出土遺物

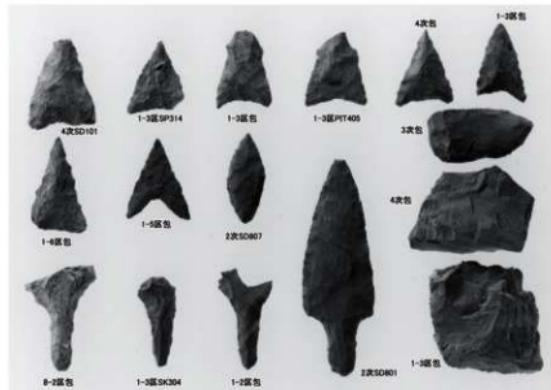


下層包含層出土遺物（1次調査）

写真図版22



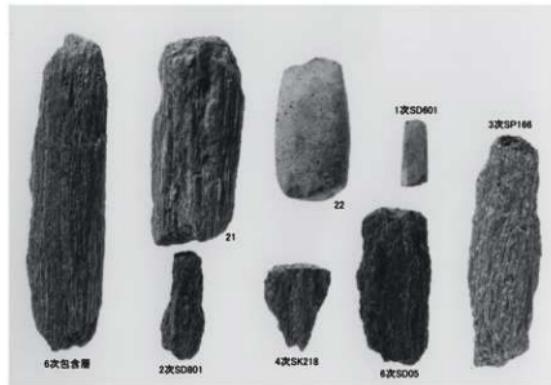
遺構及び遺物包含層出土の遺物（2）



1. 出土石器
(石鏃・尖頭器・石錐・楔形石器)



2. 出土石器 (磨石・石皿片)



3. 出土石器 (結晶片岩・石斧)

報告書抄録

ふりがな	わかまつちょうひがしいせき だい1・2・3・4・5・6じ はっくつちょうきほうこくしょ							
書名	若松町東遺跡 第1・2・3・4・5・6次 発掘調査報告書							
副書名	新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松3・4）に伴う							
編著者名	西岡巧次・須藤 宏・斎木 崑・中谷 正・藤井太郎（編）							
編集機関	神戸市教育委員会							
発行機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-6480							
発行年	西暦2013年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかまつちょうひがしいせき 若松町東遺跡	兵庫県神戸市 新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業 長田区若松町 3・4丁目	28106	6-33	34度 39分 25秒	135度 08分 49秒	20071004 ~20080314 20080416 ~20080920 20100913 ~20101122 20101129 ~20110304 20110124 ~20110317 20110510 ~20110705	第1次調査 1,215m ² 第2次調査 550m ² 第3次調査 940m ² 第4次調査 1,100m ² 第5次調査 400m ² 第6次調査 370m ²	震災復興第二種 市街地再開発事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
若松町東遺跡	集落址	縄文時代晩期 弥生時代前期 平安時代～中世	竪穴状遺構・土坑・溝・柱穴 溝・土坑・柱穴 掘立柱建物・溝・土坑 柱穴・ピット		縄文土器・弥生土器 サヌカイト製石器・磨製石斧 結晶片岩製叩石 須恵器・土師器・陶磁器			
要約	縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての遺構・遺物を確認した。顕著な遺構は少ないものの、埋甕状の土坑から出土した深鉢や、小片であり細部は不明ながらも、比較的まとまって突堤土器が出土し、同水系に立地し、同時期にかけて集落形成が行われる著名な大間遺跡、戎町遺跡などの拠点集落との関連、遺跡の伸長を考える上で重要な成果があったと考える。							

若松町東遺跡第1・2・3・4・5・6次発掘調査報告書

新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業（若松3・4）に伴う

2013. 3. 31

発行 神戸市教育委員会文化財課
 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
 TEL 078-322-6480

印刷 株式会社 興文社
 神戸市西区小山3丁目11-22
 TEL 078-924-9800